川柳塔

創刊大正十三年 通卷五二五号 網和四十六年二月1日第行 (每月1日第行)



No. 525

清水白柳追悼号

二月号



超特撰 :声:西 (化粧ケース入) ル計 PL

3 がきぬ え 5 か ば れ n た 灘

0

714

超特撰

 B

本

盛

料理も電話も

ニホンサカリ

551

こがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅



焼売

阪 な h ば 大

◆出 張 販 売 店◆ なんば高島屋/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋 堂島地下センター・弁天阜頭支店/中之島サン・ストア・



外国語

であると自己紹介をやった。ところが大正十四年というのは何年ぐらい前の事か見当がついた。それではと一九二五年といいかえると納得してくれた。それと逆に明治生れにとっては、メートル法でれと逆に明治生れにとっては、メートル法でいうへクタールとはどの位の広さか、養子にいうへクタールとはどの位の広さか、養子にいうへりをいかない。それではと一かぬというが、三合では通用せゆくにも小糠三合というが、三合では通用せいると、

くてはならないのかと憤慨している。

正しい日本語を育てるという点での川柳人の

責任は重大である。

四年というのは何年ぐらい前の事か見当がつであると自己紹介をやった。ところが大正十であると自己紹介をやった。ところが大正十四年卒業

坤 生 う 瞬 遍 な 0 擲 路 れ 勝 下 ね ば 負 12 が 2 鉢 は う 专 巻 F な 8 0 0 3 た 0 春 箬 H ぞ 0 0 本 3 歌 総 ح 白 2 痴

乾

人

2

負

け

0

33

0

ま

Si

L

60

迄

0

돼

な

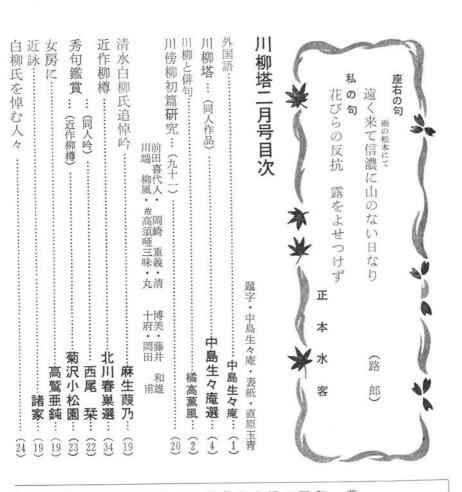
顔

国鉄でもなぜグリーン車とかビュッフェでなと思えるものをやたら使いたがる傾向が昨今と思えるものをやたら使いたがる傾向が昨今とする云々」という天皇陛下のお言葉に対し「美しく正しい日本語のお言葉を頂きたかった」と起草者に不満をもらしている。そして、と起草者に不満をもらしている。そして、と起草者に不満をもらしている。そして、ともまされる事甚しい。殊更に外国語でなくともまされる事甚しい。殊更に外国語でなくともまされる事甚しい。殊更に外国語でなくともまされる事甚しい。

中島生々庵



川柳塔二月号



川柳と俳句

、胃貴島の手桁で入完した寺、作家の

風

ラ角度の正確さ、 やつばりいいなと感銘を新たにし、 園の句、てんと虫の句、 御句を探し、砂丘の句、 藤沢桓夫先生からお見舞いの手紙を戴いた。 拝読させました。感覚のみづみづしさ、 事な俳句ではないかなどと愚考。現代俳句と さ、これで季語―季感がはいっていたら、見 ある場合、川柳が立派な俳句になっていたっ きました。そんな境界線など踏みにじって、 傾向にある点にあるのではないか、とも気づ ことに意識的に固執し、どちらも行き過ぎの とに意識的に執着し、後者は季感を無視する 現代川柳の分水嶺は、前者が季感を入れるこ ないか、とも考えます。それを、 方ともちっとも恥かしいことではないのでは 「先日『ふあうすと』 俳句が立派な川柳になっていたって、両 胃潰瘍の手術で入院した時、 あなたらしい 抒情の 新鮮 の年鑑を入手、 その他の句もみんな 東郷湖の句、 両者とも変 家内にも 作 カメ

れはむしろ滑稽やないかと、小生のような門な時代遅れ的正統派意識があるとしたら、こを守っているところに、俳句・川柳の観念的に依估地に、お互いのしきたりみたいなもの

大萬川柳「切 初步教室 雅号ぶっちゃ もう返事のない白柳さん...... 白柳追悼吟 -------本田恵二朗 東野大八・吉田水車・ 岸南柳・奴田原紅雨・垂井葵水・山内静水・藤井明朗・中筋三幸大坂形水・山上千太郎・金井文秋・八木摩天郎・阿部柳太・菊沢小松園・若本多久志・西尾(栞・川村好郎・西出一栄・ けばなし長谷川三司 西村芳川・ 福浦勝晴・香川酔々 川村好郎選 右城暮石… 44 52 50 59 42

編集後記 各地柳壇 柳界展望 …………………(薫風) 川柳家の暦 路集 「おんな手」…………………内藤 アイロン」...... (二月生まれの人) …遺稿…………清水白柳… (文秋 (庸佑) : : 65 49 4848 56 54 46 60

私 座右の句 おむすびの上にもさくら散ってくれ 思い出の道はさけたし通りたし の 句 河 内 好好 天 郎 笑

> 外漢には思われます。 てほしいと希望いたします。 にも川柳にも遠慮などなさらず、 ると思いますし、今後このような句も、 名富士の句など、 中村草田男の小生の好きな句に とにかく、そのような意味で、あなたの榛 俳句としても立派に通用す 大いに作 俳句

ひた急ぐ犬に会ひけり木の芽道

て見ても、 大変いい 句では ないのでしょう という句がありますが、これなど川柳とし

見が多かった。 接点は拡まりつつあり、更に拡まるという意 俳無差別説には、現時点では反対であるが、 ふあうすと誌一月号のアンケートでも、

東野七 、し言葉に

が確固たる考えを持って おくべきだと考え ことのないよう、川柳と俳句について、 っている」というのがあるが、 源では柳俳ともに根は一つである因縁を物語 句が川柳であるわけだが、このことは俳諧 狂句と時事川柳の領域へ逃避するような 一番新しい川柳が俳句で、一番新しい俳 川柳人 が更

方面から問い合わせなどありお詫びします。 ★前号の「 庚亥」は「辛亥」の誤りで、各

中

島

生

々

庵

選

傍 島 静 馬

ヤングパワー年功序列を脅かし 蔭口が気になり寄付を減らされず 振向いて見ねばよかった曲線美 まあまあで今年もすんだ蕎麦の味

訥訥と巧まぬ悔

みに泣

かされる

広島県 橋 鬼 焼

玄関のせまさを言うて靴 をぬぎ

信じ合う歩巾へ空が晴れてくる 歩けない足でもいいさ夢があり 走りの出来ない足だ発車ベル かなる町し ずかなるネオンの灯

出雲市

尼 緑 之 助

J

喫いつ 団交に慣れていよいよ空疎感 ける一本資本家らしくする

真んとうの生き方などと空々し

2DK案外荷物入るもの 紅白のトラックが着く2DK

表札をまだ出してない新家庭 コーヒ飲むだけにホテルへ来た元旦

大阪市

西 出

栄

客足へもみ手忘れた年の暮

来客にまみえぬ祖母の身だしなみ 吊橋のスリルに強い部落の子 行く秋を追い抜くように今朝の冷え 師の教え胸の底から拾いあげ

白柳先生を偲びて(一句)

簡単にOK仲人まであわて 事故現場交通停めて吹雪する 雨

から雪に湖を動かす鴨の

群

4

大阪市

大

坂

形

水

| 国 井 葵 水 は | 十二月見られたくない辻を折れ十二月忘年会をひとつ蹴りてれくさい握手を向うから求めてれくさい握手を向うから求め |
|---|--|
| 久 喜 阿 来 本 本 本 本 本 本 本 本 表 よ よ | 汪 |
| たも聞米 髪順タド真 階欄雨大新 胃焼胃手秋 オばうくが 染々クッっ 段外だげし 半跡を術の たんしゅん かに かに 切後雨 胃 ある こ 一耳余 めにシクす でがれさい 分に切後雨 胃 | H |
| たも聞米 髪順タド真 階欄雨大新 胃焼胃手秋 オばうくが 染々クッっ 段外だげし 半跡を術の たんしゅん かに かに 切後雨 胃 ある こ 一耳余 めにシクす でがれさい 分に切後雨 胃 | ク |
| ばうくが 染々クッっ 段外だげし 半跡を術の かに一耳余 めにシクす でがれさい 分に切後雨罩 | 战 |
| 大阪市 橘 高 薫 風 青春市 工 藤 甲 吉 要染めて人工の雪でにもやはり顔なじみ まかましたない 女の舞しずか おいまのに 関っすぐに歩いて家族ものたらず ドック入り満身剣痍とのたまわれ タクシーで行くと我が子のには乗らず 原々に巣立ち末っ娘惜しくなり かっし 度定年はタガ締め直し まっ一度定年はタガ締め直し まっ一度定年はタガ締め直し まか | おが余る国で雀は をう一度定年はみ をうったない。 |

| エジプトの女王と同じアイシャドウ老人が老人の席こしらえる角度ずれたまままだ生きられるから宮仕えというゴルフかもしれず | 東京都 増 田 次 章 乗ってきた老婆に席が二つ空き くゆらせる煙りが返事さいそくし 家具売場うつしたような部屋に住み 生きている平和子の顔妻の顔 生きている平和子の顔妻の顔 | | | 東大阪市 久 米 奈良子おしゃべりが過ぎてバッグを届けられ |
|--|---|--|----------|-------------------------------|
| ボーナスまで辛抱をして辞めて行き勝てそうな相手ならこそ受けて立つ悪い事ずくめの暮に金落とし悪い事ずくめの暮に金落とし | 本のみ友賞えにふくみ笑いする 同僚に点取り虫が居て不快 愚痴捨てに行けば課長も縄のれん 下意採らず上意下達は無理ばかり 故白柳さん 温顔の句評が雲間から聞こえ | きかぬふりして老妻はきいてくれ 安房にわるくいわれてたのしい日 男から折れれば女すぐに折れ 無神論だが豊作へ灯をともす こまり こうしい という はまから はっぱい という はまかい という という はまかい という という はまかい という はまかい という という という はまかい という はまかい という という はまかい という という という という という という という という という とい | 去ラきれっス焼は | 指切りをしたい小指の弥勒仏 八尾市 香 川 |
| | 文 | 独仙 | 一 , , | 酔々 |
| | 7653 | (UADAS) | 1968 | |

| 山跡 | |
|--------------|---------|
| | 大阪市 |
| | Œ |
| | 本 |
| | 水 |
| | 客 |
| 大詰まで自作自演の文士劇 | 大阪市 本 多 |
| | 柳 |

志

しく

元に度い

欲も持ちは 戻す会議 Ö

じめ

て運勢に立ち向

î

で白

12

室

刑 場跡冬の色し Ш 争奪むかし て家建 のままに 時氷る

叶んでる泣いてる羅漢凝集す

靴脱い 杏い で古寺のいわれのまま座る 0 ぽん冬を呼んでいる高さ

倉敷市 1 峫 甲

風

浄玻

釈

白

柳

璃の鏡へえんま目

を 細

85

水

粉 T

翁

0 女が が佇ち

子の寝顔 下手が手真似たよりにして話し ピンチダルマ転んだままの位置 明日 へのネジは自動捲き

老夫婦

つの

席を替り合い

0

向

43

たとこ

10

噂

社の

信号のリズム は 同じこと

年

0

瀬

5

京都市

都

倉

求

芽

折り込みの安売りからまず見る女 落葉もうあとは掃かない年 枯らしをガラス戸倍に響かせる の暮れ

御

機

嫌

悪く判斜

人は信じぬ

有刺鉄

線

の鯉殺ろされるまで眠れな 62

下関市

石

JII

侃

流 洞

逢うた夜の

二人は程良く疲れてい

活字のような規格人間

理

屋

" 鳴きそば足から冷える空 チな本終着 駅で掃き出 され 2 風

ズ 夜

リよと女将が少し気をもたせ

小が首出

して見るいい陽気

H

へ桜狂って地方版

大 Щ 10 7

絶景は日本海 の沈む山

嫁がせて愚痴には 生浜にて なら

80

独

り言

ゆずられた広さで心あたためる 濡れ衣を着て晴天のまぶしすぎ

輪差し

0 花を撰る

岡 山県

直

七 面

Ш

めてからは無口 なお人良し

| 々好

日

冬には

冬の

花活け

T

ても海しか貝に家が無し

竹原市 森

井

菁 居

7

この一秒が過去になるおそろしさ 門柱に看板の無い屠殺場 知らなさの強さ断言してみせる 他人をして言わしめている声を聞く ふり向けばすでに女は背に居らず 消火活動阻むアーケードの砦 ちょっぴりと皮肉も交じる老婆心 三面を見ながら忙しい箸動く 借りて来て貸して長屋の十二月 親として再起させたい嘘をつき 顔見世の義理人情に酔える齢 席ゆずる心のゆとり失わず 車より免許証ほしい人間性 ぼくの裏っ側妻だけが知っている 男嫌いで押すよりほかなし三十五 絵ごころをくすぐる雪も旅なれや お世辞真に受けて佳き日の床柱 テレビで云うたるぞ」とはしゃべり過ぎ 横山やすし暴力 西条凡児暴言 寄席 (二句) 門真市 奈良県 木 石 福 不二田 倉 島 村 旅 鉄 水 三夫 風 児 洞 顔見世はだらりの帯で幕が開き 捨て嫌い空函さえも積み重ね 開業医老母も姉も白い服 小理屈がそれでも楽し同窓会 拝観料値上げ大和の仏達 鏡台のひき出し女の唄がある 泣き虫の女が好きな台所 実益の方の魅力で集め出し おみくじを子等はゲームのように引き 逆境へ無神論者も手を合わせ ごゆっくり四十五度で送りだし 何故逝ったわしより若い人気者 水ましの出来ぬ庶民の市場籠 自慢ともとれる資産税の愚痴 流行を着て冷ややかな鼻となる 差ずかしいからひょっとこの面かぶる かたつむり今更家をすてられず 京都顔見世 白柳さんを悼む 「子等切手蒐集を始める」 藤井寺市 宇部市 八尾市 高槻市 桜井市 若 岩 17. 高 西 柳 本 杉 10 雀踊 実 潮 鬼 わ

男

遊

を

花

北風 ~ ンだけがつなぎ止めてるだけの 末のビラ気忙しい足で踏 なくこの へ飛び散ってゆく子供達 あわせが崩れたら 仲 尊敬をしておりますと逃げられる 母 冗 妻となりたる君のミニ 0 談 ない \$ 妻の友達には言えず 子 の人形の鼻が欠げ 眩

愛情 0 限界鉢 の菊も知 0 鳥取県

清

保

さて今日の生活の戦い無事暮 一声も会話も活気づく師走 れる 水

気のからっ風 関市 弘 半 休 門

故 の芽をズバリ叱っていい親子 升で陽気にさせてケリをつけ 防止補導犬に手を引かせ

午前

様だけ

がいいい

害虫

は死なず人類だけあえぎ

のアンテナ坐りにくかろう 西宮 市 若 林 草

藁葺

右

隣りの番までうちの犬引受ける

ニキビーつ三面鏡に噛りつき

定是年 に生ける渋柿一つのこされる へ歯 置きみやげだという地鎮祭 のうくような世辞並べ 大阪市

加

井

庸

佑

姬路市

岐

不

酔

がの話

は

なさく葬儀

葬祭なくてはならぬ人という 野 田 素 身郎

> C M 新 入社 のない駄菓子屋で子等にうけ かしましどもに値踏みされ

偶然に出来たタバコの輪を見つめ に光るおつむでなじまれる

大阪市

有

信

新

之

助

働かぬ手によく止る自動巻 ソリンの ように冷や酒 42 れてゆき

サー 「菜をきれい ビスに白紙で渡す領収書 に積んで店があき

使 世間の親戚で恥をかきいみちが違うと母にまであたり

計

を背負

ってちょっ

びり生意気

大阪市

天

IF.

T

梢

别 甲斐の一つ法句経との であい

逢うてみて反対したを後悔 けるのに汗まで拭いて塩を撒き 産をするまで税務署見離なさず

倒

返信に〇だけ書いて筆不精

大阪市

福

井

野

洣

路

下 関市 桜 不

水

| 大戸でわめいて声にならぬ夢 大声でわめいて声にならぬ夢 不切りを使ってボスの生返事 | 東大阪市スの嵩ライバルの目と絡みけて返す言葉が出てこない | 娘さんだから居眠る肩も貸し 大阪市 成名に金かけ孝行したつもり 大阪市 | 高飛車に出て弱点に触れさせず 高飛車に出て弱点に触れさせず 手をつなごなんて結局みな孤独 健やかな顔を揃えた初ごたつ 竹原市 | 良心に相談しててなま返事 良心に相談しててなま返事 |
|---|--|--|---|--|
| 竹り | 竹い | 中 | 山 | 中 |
| 中 | 中 | JII | 内 |][] |
| 綾 | 肖 | 滋 | 静 | 晃 |
| 女 | _ | 雀 | 水 | 男 |
| 京年会あけて飲む日を相談し 空間市 木 山 遠 一 になって賢い方が折れ 空間市 木 山 遠 一 | 神様も宣伝戦の初詣り 一声 一川 | 背ですねる妻の素振りに酔がさめ おけさ節出る湯かげんを焚いてくれ おけさ節出る湯かげんを焚いてくれ 相談欄女上位のいい度胸 中白柳先生 (一句) | 想い出が呼ぶから振り向かない私 想い出が呼ぶから振り向かない私 水 た 院 妹 入 院 は 入 院 は アンドラ は アン・アンドラ は アンドラ は アン・アンドラ は アンドラ は アン・アンドラ は アンドラ は アンド | 日塚市 野 坂 つ き 子年賀状来ぬ人偲ぶ屠蘇の席 陳情を聞いて善処は何時の事 |

手さぐりにやっとなじんだ洗濯 妻の 往診の医者も並んで日向ぼこ それ以上飲めぬ男が酌いでくれ 音を追う暮らしに耐える力とぶ 光り欲しせめて妻病む間だけ ささやかな抵抗親父ふて寝する ご無沙汰をして居ましたと医者が来る ドクターストップ食ってもやっぱり飲んでい どの孫が泣いているのか朝が明け D み足ぐらいで若さへこたれず 枯しへ木の骸骨が泣いている 柳の鉋の屑か牡丹雪 いの手出せぬとこから祈るだけ 日の闇うごめいて夜が来る 白柳さん死す(一句 酒もい ンサー連れて娘のボーリング 留守娘は娘としての気を使い 馬にのって末っ っしょに笑い出 娘口答え 神戸市 島根県 大阪市 機 市 仲 堀 児 711 島 江 内 与. 3 どんたく 天 īE. H 朗 笑 外濠の唇までは埋めさせる 浜ゆけばかにの親子が逃げてゆき バスガイド富士山頂はまだ知らず 設計を変えるたんびに坪が増え 惜しまれて古老のってく雲の峰 老妻とうなずき合う処世術 棟上げがそのままになってる十二月 酷評をうずめ空しさだけ残り 共感は割腹の記事を買漁 意気地なしで結構妻が待っている 紳士とも言われ木石とも言われ 新 ハッスルへ恋成立と社でみられ うちの猫だけはと猫の肩をもち 娘のくれたボーナスコート派手に着る 一日の違いを仏滅だ大変だ お世辞さらりかわして戻る年の功 聞 待した一言聞けず汽車は出る 故白柳先生へ一句 K 包んで渡す知恵をかし 1 下関市 鳥取県 市 志 JII + 岐 橋 賀 崎 Ŧ 1 木 秋

新聞を二日まとめて見る勤務

兵庫県

大

江.

秋

月

けまつ毛涙を何とうけとめる

美爾市

安平

次

弘

道

女

石

| なが電話雪の丈まで比べ合いこの線で握手売り手は折れたがり | り出 | 起し | 嗚呼釈白柳様(一句) | 岡山県 | 箒の目生かす銀杏の二三枚 | 鋭角に炎えトウガラシ冬に入る | お隣りがもうける煙吹き降ろし | 陽の目見ぬとこへ鉄釘ブチこまれ | 島根県 | 仲人としてもう一押しの才に欠け | 倖せは鬼才と云われる子を持たず | 新調をして年頃の娘に気兼ね | 煙草の輪女の支度を待つゆとり | 米子市 | しくじりを箇条書きする程に老い | 子に任す炊事の音が気にかかり | 妻宛の賀状一通歯科医から | 寒さにも触れず新婚からたより | 善通寺市 | 苦労人金は廻らぬものと知り | 勝負したい時に邪魔する妻の顔 | 意にあまえかね | 義が負ける現実と |
|------------------------------|-----|------------------|---------------|--------------|-----------------|----------------|----------------|-----------------|----------------|-----------------|-----------------|---------------|----------------|---------------|-----------------|----------------|--------------|----------------|---------------|---------------|------------------|----------------|----------|
| | | | | 出 | | | | | 小 | | | | | 林 | | | | | 岩 | | | | |
| | | | | 原 | | | | | 砂 | | | | | | | | | | 田 | | | | |
| | | | | 敬 | | | | | 白 | | | | | 瑞 | | | | | ひさ | | | | |
| | | | | _ | | | | | 汀 | | | | | 枝 | | | | | おお | | | | |
| 落日の塔へ声なき遍路笠集団の見合いチラホラ国訛り | 守口市 | パトカーの音突き刺さるように凍て | 筆太に父の賀状のたくましき | 幸せは孫の名前を覚えかね | いつまでも近道でないビルが建ち | 大阪市・ | 下田富士絵にして雑煮食べぬ村 | 雑木紅葉車窓はお吉の物語 | お吉ケ淵明治の写真添えてあり | 柿一つ伊豆の青い青い空 | 伊豆の旅に | 京都市 | 夕食に明日も働く妻の酌 | 転落のおしゃれ段々悪魔めき | 羽のばす筈が寂しい一人旅 | 宝くじ当てにデイトの予算立て | 和歌山県 | 日の本の三島魂い見せて呉れ | 皆負けぬ顔見合せる土俵入り | 横綱を這わせてすまぬ勝名乗 | 惜しまれる紅葉イヤイヤしつつ散り | 白柳さん訃報に接して(一句) | 岡山県 |
| | 羽 | | | | | 古 | | | | | | 松 | | | | | 西 | | | | | | 大 |
| | 原 | | | | | 岡 | | | | | | Ш | | | | | 尾 | | | | | | 森娯 |
| | 静 | | | | | 美 | | | | | | 杜 | | | | | 公 | | | | | | 知句 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

的

作

楽

步

房

寺参りよりも婆さんテレビ好き 年功とは言わず年期と云う腕 裏目 大変な事になりけり内輪もめ 履物をきちんと脱いで嫌われる お化粧が気になるうちは泣けぬもの 酔うほどにかたくな妻が去来する 初心忘れたか正月寝て了い 良心の苛責に耐える金儲け こんな寒さへ何が散策 2DK工夫の余地のない広さ 売出しに踊らぬ不景気風が吹く 生き抜いたスラムの窓の干羽鶴 母と子と鳩の遊べる塔でよし てのひらに載る盆栽の大自然 カーテンのない窓があり冬の月 女三人四十男をだまらせる サンドイッチマン今日はジングルベ 争の 5 から かりやれ スクラム老いの肩を組む 裏目を追って年が暮 と言いたまいそれっきりそれっきり 和歌山 愛媛県 松江市 奈良県 れ 県 ル 草 野 村 木 0 歌 村 E 深 Ш 崎 太 酔 要 旭 祥 茂 津 月 升 次 童 蝦蟇口 諸仏発祥の岩を疑問のままなでる 今日も無事済んだ飯場の灯が明い 付き合 石 重文は格子の外から拝まされ 旅帰り悲しいしらせ聞 俺の声こんなんかい 商魂がもみ手しながらまけて呉れ 無責任なのが大きな口をきき 飯場にも秋をしらせるサンマ やけ酒が僕の心を落付ける 保養です悠々自適と尋ねられ |楽の妻のいねむり子等が真似 皮をむけば鬼神となる女 段の手摺柱 億が自作自演に 事場に予裕が欲しい十二月 三島事件 白柳先生急逝 (一句) 大和国室生山にて(三句) 本進氏室生村々長に就任を祝して いが妻に内緒の財布持つ の底で一 へ寄進の 円邪魔がられ 息をのみ なーテープ聞く いた朝 笠岡市 大阪市 高槻市 奈良県 0 香 西 出 Ш 室 辻 原 谷 田 竹 真 徹 季 青 奇 舟 賛

| あでやかな看板の裏蜘蛛が住み | さようならなお立ちつくす点と線 | 松江市 吉 岡 逓 児 | 腹を切る話に医者の無表情 | それぞれに庭の草花主を思い | 腐養土を抱いて時季待つ庭の花 | 決心がついて余白取りもどし | 八代市 永 松 道 雄 | 捨てに行く手間を省いて置いて出る | 新楢山節 | 成功は成功でも自殺 | 百姓じゃ喰えぬと百姓子を訓し | 葬式は寺 信仰は別にもち | 兵庫県河原みのる | ボーナスをうらやむ立場の金詰り | 値上りヘスピード感の増す師走 | うたた寝へ皮肉スチーム切れていた | 花束をかかえドアーを足であけ | 小松市 馬 場 魚 山 | まだ煙大阪市歌はほこりにし | 千株の配当小遣いにもならず | 湯豆腐も馬鹿には出来ぬ物価高 | みの虫が庭木に一匹だけさがり | 大阪市 今 西 章 雅 | 与論集中対決もなく無投票 |
|----------------|-----------------|---------------|--------------|-----------------|----------------|---------------|----------------|------------------|----------------|----------------|----------------|--------------|--------------|-----------------|-----------------|------------------|----------------|-----------------|------------------|-----------------|----------------|----------------|-------------|------------------|
| 頼もしい昭和生れの頑固さよ | 高槻市福田丁路 | 逝く秋になぜ又君は死を急ぐ | 悼白柳氏 | つい酒に釣られ秘密をもらしかけ | 若いけどやるぜ転業は二十代 | 大阪市 市場没食子 | カレンダー放り込まれて年の暮 | 振り返り見れば小さく里の母 | 分相応の暮しテレビと妻と子と | 曲線も大事に引いて明日がある | 倉敷市 小 野 克 枝 | | 新築の床から上は借りた金 | 教会で誓い家裁でまた誓い | また一人産んだかと年賀眺められ | 堺市藤井一二三 | 61 | 嵌めわすれた入歯とりよせ忘年会 | 洗わんでもよさそうな往診手を洗い | 以下同文家人の知らない人ばかり | 伊丹市 小川 静 観 堂 | | 亡き白柳先生に捧ぐ | よくもまあこんな似た人などと注ぎ |

月も 北国に僕も冬眠したくなり 立ち枯れた松の舞子は絵にならず H 日 年金を貰ってるから老けに老け 逃げられるところは逃げよう妻がいる 明 玉に瑕知っていながら惚れてくる 名器だから人の手垢を吸い尽し浄土まで十七文字の旅とおし 2 金比羅の石段そんな歳かい 屋台そば精一杯に生きてい 日 バ棒で日本の明日を支える気 曜の窓開け放 本語外語に虫ばまれ 年の無事が尊い除夜の鐘 面の下に炎えるもの見せず の中に彼が待ってる自動ドアー ち帰える忿懣妻には迷惑な 地球 清水白柳さんを悼む(一句 一へのプラスの酒なら酌ぎもする まで十七文字の旅とおし も凍てて犬の遠吠え つ共稼ぎ な 姫路市 奈良市 松江市 米子市 岡 声 Ш 市 県 小 八 村 11 池 宮 林 木 F 浜 孤 Ŧ. 春 古 笛 Z 代 E 生 心 ボー お歳暮は辞退しますと予告が来 横顔はハンサムだけどよくしゃべり ミニミディー Ш 詩呆けの顔を落葉になでられる 風流な鼡が活けた柿を食う 旅慣れぬ母駅ごとに指を折り 薄情ではないぞ一人で起き給え Uターンする人生も無にならず スモッグを掻分けて出た初日の出 マンホールの蓋につまずくのも年か 疑えばそうにも見える興信 今日からの旅を支える鈴鳴らす 値 立腹はもっともですと逆をつき の家アクセサリーに柿が熟れ めて紅刷かずひとりの喪をまもる 上りで減るビールには候わず 夜の鐘撞いてお寺の居候 人日くいそがば廻れと歩道橋 ナスが出たぞ師走の人となる マキシー女忙しく 竹原市 倉敷市 呉 笠岡市 大阪市 愛媛県 市 松 1 宮 松 林 渡 尾 野 本 島 下 辺 あ 梁 暁 忠 甦 蘭 10 水 光

き

幸

童

| 保険屋に男がなってさげすまれらバイにたてついている違反ズレタイマーの故障夜中に飯が炊け 芳 朗 | 身元調査するまに他社へ引きぬかれ家計簿のリズムへ割り込む物価高家計簿のリズムへ割り込む物価高を募者は来ず広告屋に追われ | 暖をとる障子に親子らしい影君は君 君の歩巾を持ち給えわかってへんなあと淋しく語尾にごす 岡山市 川 端 柳 子 | わらじ履く牛にも逢えたと木曽便り この人のきれいなお世辞ぬくめとく 富田林市 岩 田 美 代 | 義理立てた金で義理欠くはめになり一人旅思いもよらぬ出来心一人旅思いもよらぬ出来心和歌山市 土 谷 城 石 観ッ子に隣りは叱る母の声 | 信感金の都合でまた。 |
|---|---|---|--|--|--|
| 春の芽へ湖は一様に青きのみ親猫はまだ去りがたく春炬燵毎日和杖で見上げる枝のふり に鈴市 高 津 徹 也 | | 浅 川 八 郎 | 四方天弘 | 毎三県 岡田 拳法 鎮痛のとたんその胃が飲みたがり 鍵束で看守女囚の児をあやし西宮市 島 居 百 酒 | 尻尾はね上げて目出度い鯛にする 白鳥の波紋平和な二重橋 七五三欲のない子へ四苦八苦 声屋市 丸 川 初 甫 |

有りつたけの 友情が薄れ年賀の字も細り 過疎の村誰が汲むのかはね釣瓶 断絶も時の流れと逆らわず 介錯が昭和元禄活を入れ 夢一つ追うて余生はまだ消えず 男にて候体重は五十K 遠慮なくスモッグ二重橋渡り ペンペン草がはえたらその時考える 着飾ってだだをこねてる七五三 おしゃれしてませた口きく七五三 母親の衣裳鏡べの七五三 若禿をバーは社長にしておだて ボロ儲けなるほどないとひっかかり Ш 売ってからの内職悲相めき 八尾天満宮境内にて 肩書き刷つた年賀状来る 岸和田市 鳥取県 大阪市 松江市 八尾市 兵庫県 谷 葛 宮 柳 古 遠 城 地 楽 JII Ш 伊 無 双 鶴 鶴 口 \equiv 閑 郎 楽 丸 声 住 休耕地ここは瑞穂のなれの果て 出羽庖丁の刃先に止まる冬の蠅 灰になる日の近づくを言い募のり 花模様よぎれる猪 大山は晴錦秋に身も染まり よかったなと近所より添い話す運 意気秘めて飛立つ猪唐津焼 来年の旅も約して師は逝かれ 酔うてても人に云えない過去があり この方が手頃だとは予算面 師の影に遠くいても疎まれず 新教をすすめに来たも病んでおり いがみあう遺産は抵当に皆は 米子海岸 近火に想う 白柳先生 故清水白柳氏をしのぶ (一句) (1) の年賀状 唐津市 61 b 市 菊 新 伏 西 沢 岡 見 JII 小 П 茂 松 天

年賀状小さな借をフト思い

吊皮はダイヤの光る方の手で

美

子

袁

すでに猪突邁 進とは

Ш

村

好

郎

大休 をす 止 0 つもり な元 気を出 養 0 世 H 0 中 をつづけ で病 3

は七十 F. 家 なりに歩道 僕も修繕して師 走 0

買うつもりだけですませて妻帰

譲られ 老い 訓 昭 され 和 縮む妻も近頃回顧 元 た席の 禄 退二 85 温く味 を豚 進 0 がほの 処 \$ 趣味 全観 喰 63 ぼ のと

> 若 本 多 久

志

同

栞

郊外の風霜焼けがR

が耳にでき

うてくれただけ

外

0

月

10

草の

芽を見

け

18

1

帳繰りくり

妻

0

用

北

111

春

巣

路

幸

生

七

求人広告読むひまのない有難さ

ャ

1

ャ

アの

茶が出ると聞きや

めにする

西

尾

大 会

路 忌川 柳 生 郎七 口 麻

日

(日)

題 ٤

選

者

講

故麻生路

郎先生七回忌法要

昭和46年7

麻

★ご投句は七月一日着便まで。 (各題三句以内・席題はありません)

偲 슾 3 費

会の辞

贈

呈

村

千円。 三百円。 大阪市南区 会場内食堂で懇親宴。 (記念品

帰り来て炬

燵

母 3

者人

欠炬燵の

か

0 心

尊とけれ 知る

がだより

北山

雨

にあ と対いけり

Total Park

勇

0

0 時の 元

H

P

酒

禅

味

0

催 JII 一种之町

主

社

-18 -

場 御堂会舘

숲

(南御堂)

大阪市東区北久太郎町四 電話二五

•

五八二〇番

地下鉄本町駅南出口から南へ二百米) 六八

西 尾

中若 島 本 多久志

挨 開会の辞

一

会

葭 生々庵

堀 人

条井永 東洋 不二 也 樹

島 江 生砂 宣 K 庵 人介

中近岡三増

女 12

高 鷲 亜 鈍

この年で呑んだ明けの日シャンとする 紐にみえても交渉怠らず女の事故 女房におべっか盲夫を大事にしなと

火だるまとなっていのちをとりとめた

ゴミ貯めになって愚痴や不平をきいてやる 宇宙聖人宇宙悪人存在す 七・七が面倒くさい短歌かな 金光様は百姓だけのものならず 一日に一回コーヒーだけが所望

近

詠

団体の一人せわしい写真班

月

原

宵

明

もて余す身のおきどころ寝正月 傷心の自虐喪服がよく似合い 佗び住居養老院の順を待ち 借衣裳似合うお世辞を痛くきき 隣りとの不仲落葉でなお募り

恩給も五年目という初春静か 前ぶれのあった表彰沙汰が止み 大万へまた来てほしい仏様 白柳先生の計に思う(一句

須坂市 高 峰 柳 児

> 人間も鶏舎に近い団地の灯 針山の下おふくろの貯金箱 部分品取換えきかぬ古稀という 正しきが勝つとは歴史言わざりき

ああ白柳さん

釈白柳何用あって急いた旅

和歌山市

秋

月

宏

方

暁 明

大洲市

米

沢

過去みんな水に流して高砂や 安定所過去がよすぎるので困り

わが家にもそろばんのいる十二月 白柳氏を悼む

胸貸して貰った人に先立たれ 岐阜市 市 川

魚

割り切った生活子の知恵孫の知恵 目くされの銭できりきり十二月 離農してみれば田舎もほめるとこ

一さしの舞い人生はそんなもの

庫

文

今治市

長

君の名も又黒板から消えて終うた

けち一人まくに一応散会す 陳情を受理するだけだのに威張り 信心でなく気休めの初詣 神さまだから十円に腹立てず 句読点程度わたしの大みそ日

紀の海の潮騒君のあとを追う

津

清水白柳氏追悼吟

麻

生

葭

乃

19

川傍柳初衛研究

九十一 清 岡 崎 博 重 美 義 高 丸

前

田

喜

代 人

JII

端

柳

風

須

唖

Ξ 味

井 和 雄 岡 田

甫

府

前田=一礎稿に替。意図がみえすいているが もったいないから下駄を捨てては戻ら いスバシリ売りがやって来たという江戸風 神田祭の名物象の行列のあとから、

丸・岡田―礎稿に尽きる。 だけで、いただけない。

「うっちゃって」は面白味を出そうとした

芭蕉はころんだまま下駄を捨てて帰ったと ところまで」を利用した句。雪見に行った 清―芭蕉の句「いざさらば 雪見にこ ろぶ

いう意味だが、あまり感心した出来ではな

558

下駄をうっちゃってばせをハ帰る

象の跡から珍らしく売て来る

藤井---象は山王祭の有名な象。麴町では大 かを暗示した象であろう。 清=|象がわからない。動物の象ではなく何

藤井==賛。芭蕉翁の風流心も川柳子にあっ

膝や手をたたいて翁かへるなり

転はずば翁の雪見はてがなし

など、芭蕉の句を利用した句はかなり多い

雪見には馬鹿と気のつく所まで いざさらば居酒屋のある所まで 拾一・28

拾一.28

らスバシリが解禁になり、ボラの小さなも は四名の人が入り歩いた唐人行列。 きな竹細工の象を鼠色の木綿で覆い、足に に江戸っ子は珍らしがったとある。従って のでたいした魚でもないが、生きのよいの 「珍らしいもの」はちょうど山王祭の日か 祭にもけだものを出す麴町

異国人来聘を真似たもので、

高須―既出「どっこいといゝ~~芭蕉二三

丁」で詳説されたので今さら説くまでもな

やれやれと雪から下駄を手に戻り

しかしボクなら

戌に、神田祭は丑・卯・己・未・酉・亥に 神田祭は九月十五日で、この江戸の二大祭 高須=これまた既出「すばしりの魚でん核 行なわれ、麴町から造り物の大象が出た。 になった。山王祭は子・寅・辰・午・申・ 礼は、延宝九年以来隔年に行なわれること しくは書かないが、六月十五日の山王祭、 敷への馳走」で詳述されたから、クズクズ 出世する魚はどんくかつち也 すばしりは御輿の跡を追って行き

河

鉦、太鼓で町をねりあるいて見物人をよろ した楽人らが「糀町」と書いた旗を先頭に

象に続いて暑いのは法師武者 一屏風立てると猿や象通り

それを詠んだ句も相当ある。

丸・岡田=藤井説に替。

縮きる高尾紫式部也

鼡

岑に身請けされた十代目高尾で、
 が姫路から越後の高田へ国替えとなったの 一緒に赴いた。したがって つくられる。「高尾」は榊原式部大輔政 は越後縮のことで、 小千谷地方 のち政岑

題句の意。 というように 名産の越後縮を着たであろうというのが主 二代目はむつの花さく国へ行き 高尾も紫式部も越後に住んだから 「越後高尾」とも呼ばれた。 ど存知の通り越後守藤原為 傍四· 17

高須

清氏の説通り。

何に間違いなし。

この手法川柳にはよく ただ併び称しただけ

かと改めるべきである。 式部も越後に住んだから」は、 使われている。 任国から取りよせた、とか、父の縁でと 礎稿に賛。 細かいようだが 紫式部の父

そらに川出来ると吉野さびれ也

清=吉野は隅田川に浮かべた最も大きな屋

份 · 43 九 18 ぎる頃からひまになる。 形船「吉野丸」のこと。 などに仕立てられるが、 納涼・雪見・花見 時期的に七夕を過

餓鬼が飯くふと吉野はさびれ也 份 . 26

藤井一賛。

ればそれまでの句。 高須=「空と川」が 哀れにも面白いにも吉野丸 老込むと後生を願う吉野丸 吉野丸は既出。 「天の川 ||銀河||と判 = 17 - 2

勾当の内汁とめしく

丸・岡田川替。

るというところだろうか。 所までこぎつけた勾当が、節約をするため る。 清=勾当は盲人の官名で、検校の次に位す に汁と飯ばかりという粗末な食事をしてい 主題句の意味は検校にもう一歩という

る。 川端 ない。それだけにケチな節約をけなしてい を不人情者としてあまり同情的にはみてい 一替。川柳では金貸しを業とする検校

前田川 寸疑問だが、この句では前であろう。「汁 と飯、汁と飯」は三度々々一汁一菜の下の 高須二勾当の内が勾当の家か勾当の間か一 ち、極端な節約ぶりを詠んだものである。 一汁だけですますという句である。すなわ 諸説に賛。 勾当は検校・別当の次に

なくなり検校の次になった。 位するのであるが、いつの頃からか別当が

るが、 岡田| 描き出して失笑させられる。 丸二諸説賛・勾当の家の節約ぶりを端 小生は勾当のあいだと解しておりま 「勾当のうち」は家とも間ともとれ 的

563 大一座下戸ゑり取て仕廻ふ也

狐

す。

ば下戸 女の方にぜいたくとなり、上玉を選りとっ は正気である。酒肴には気がないから自然 それから女という順序になるが、下戸の方 清=大一座での登楼だから飲んべ てしまうことになる。 もいる。 飲んべえの方は、 まず酒 えもい

葉

を好箇の説明句とあげている。 礎解で納得した。三面子先生は 藤井=- 賛。そしてその下戸は 高須=「下戸ゑり取って」で一寸迷ったが 目ぼしいは下戸にとられる大一座 大一座下戸寝たがってしかられる一五・25 安永

とんど居なかったのであろう。 廻ふ也」では、あとには見られる女郎はほ ばならなかったのだから「下戸 大一座の頭数だけの女郎の数を揃えなけれ つく者はことごとく狩り出して、 岡崎=|賛。大一座の登楼には、女郎と名の ゑり取て仕 ともかく

吟

前月号から一

1 なれぬからダイヤで身をかざり

巻頭にふさわしい何がずらりと、五句並びました。教養のない人が、ダイヤの中のダイヤで、なれぬからという言葉の力で、作者を知らぬなれぬからという言葉の力で、作者を知らぬなれぬからという言葉の力で、作者を知らぬなれぬからという言葉の力で、作者を知らぬなれぬからという言葉の力で、作者が必ずる。

グアム島で真 0 黒焼けしたハネムーン 水

いなななに 、時事吟として鑑賞に値する一句である。となって来た。句の説明は要さないが、面白となって、グアム島まで出かけるハネムーンとなったというか、素晴しい感覚をもつようとなったというか、濁性的新婚旅行も派手になったというか、個性的

せ の君にされてひたすら稼がされ 甲 吉

語を、心ゆくまで味わって下さい。せの君という俗語をうまく結ばれた楽しい佳吟されという俗語をうまく結ばれた楽しい佳吟せの君という俗語をうまく結ばれた楽しい佳吟せの君という優雅な古語と、ひたすら稼が

タンタタンタン朝は港のリズム持つ

発動機の音がこだまして朝靄がだんだんに発動機の音がこだまして明けてゆく、港の朝うすれて、リズミカルに明けてゆく、港の朝でが彷彿としてくる。その港は、北の海の港でも、南の海の港でもよい、曽て経験した港の朝に、「ヤっている自分を見出すことが出来る。「ヤンタタンタンというリズミカルな言葉を詠いだした、作者の詩情と清い美しい感覚は最高のものと思う。朝の港はリズム持つと普通するところだが、朝は港のリズム持つと、作者の年輪がここに出ている。

辞められる社員ほんとに羨まし

嘆された一句である。 吹された一句である。 「関って明治大帝が、社長の圭井堂さんは、明治天皇の心境で、この頃の世相をつくづく概能を表している。 は、明治大帝が、社長の圭井堂さんは、明治大帝が、桂冠する大臣に、辞め 圭井堂

かな損損キリン草派手に咲く

波踊りの踊らにゃ損損を思い出す、その通りかな損損という表現は誠にうまい表現で、阿のな損損というように咲いている。咲いすが到るところの空地や、道端に、それりン草が到るところの空地や、道端に、それりとぜんそくの原因という、黄色い花のキ小児ぜんそくの原因という、黄色い花のキー 1

キリン草の咲き方である。

向 のホームは冬の日が当り

な世相の断面ととって、鑑賞してもよい。 りゅう はて、出来ぬ出来ぬとず切に追われている。 いて、出来ぬ出来ぬとず切に追われている。 然し見遁している。そしてオーバーのポる。然し見遁している。そしてオーバーのポる。 はし ば出遭 うてい こういう情 景には、 しばし ば出遭 うてい

種も七十才のは喜こばれ

四十、五十、の艶聞や、情事は醜の一字に四十、五十、の艶聞や、情事はこの記事を読むとはほえましい。

専門語使って闘病 板につき

にしていないところが察せられて面白い。突起炎だという説明などして、結構闘病も苦言葉や、普通盲腸という言葉は正しくは虫様言葉や、普通盲腸という言葉は正しくは虫様の専門語の中には、医者が使う、ドイツ語も板につきで、闘病歴を物語っているが、こ板につきで、闘病歴を物語っているが、こ

どないなと思えシャッター 降りたまま 住

ていたら、格子戸越しに声でもかけられる。で。日本建ちだと雨宿りも出来るし、閉まっ宿りも出来な、シャッターが下りたらそれま表現されている。外国の建物は軒がない、雨表明されている。外国の建物は軒がない、雨 語を効かした川柳の独壇場である。どないなと思えは、休業、閉店、倒

沂 作 柳 楢

前月号から

沢 //\ 松 景

さよならと言えず病父に又来ま 君 वं

く企くまない巧さがある。では、人情の花が咲押し上げられた時、美しい嘘に人情の花が咲た此の人間性の美しさ、人間が人間性昂揚へたがの人間性の美しな、人間が人間性のだった。

+ ッタチャンスはいはいを追っ 豊平次 かける

句の叙法が参考になる。 い。あまりに気取って失敗の句を見るとこのて誰にでも判る句、軽い句は反って難かし正月の平和な軽いスナップ、素直に受取れ

才女に遠く好みの柄を選

はやや抵抗を感じるのではあるまいか。てが隠されて居る処に何も知らない第三者にてが隠されて居る処に何も知らない第三者にたことが邪魔をしてこの句と喰い違ったものたことが邪魔をしてこの句と喰い違ったものたことが邪魔をしてこの句と喰い違ったものたるが帰人好みのゆかた展を見て失望し

旅ひとりことさら夕陽胸に落

も扱い方によっていい句が生れる。下五がよく光る、使い古るされたこの種の ひとり旅の原因がことさらの伏線になって 句

ひたむきな愛に仮面をもてあます

あったが、それを思い出さして呉れた。終いに仮面の儘に情死する映画を見たことが若い頃スパイに惚れた娘に追い廻わされて ふきあげ 虎城

倒産を見下すようにビルが建ち 西

るが、此の場合はこれでよいように思うが直を弱めるのでなるべく避けるよう私はして居面でもあろうか。以前からようにの句語が句面でもあろうか。以前からようにの句語が句思っては居なかった、句の上に年齢の現われ思っては居なかった。 せば 「位置に」であろう。

を鳴かせた腰を孫が揉み

西

生れると言ういい指標。
上夫次第で出来る時間的な幅も出来る、工夫次第で出来る時間的な幅も出来る、工夫次第で 工夫次第で句は

(札の下で番犬みがまえる

が証明して居る。 が証明して居る人間の社会では人間が主である他用して居る人間の社会では人間が主である他はすべて隷属物であることをはっきりこの句が証明して居る人間の社会では人間が主である他人に表札は猫に小判より縁遠い、その表札

イミスのミニは挑戦する構え

えて、内容の充実したよい句になった。とはなかなか面白いミニに対しての批評も加とはなかなか面白いミニに対しての批評も加いイミスの焦だちがよく出ていて挑戦する

切 った同士入湯馬が合い

う場面、入湯では読みづらい湯槽としたい。同士が同病相哀れむで温泉宿の湯槽で語り合盲腸とか潰瘍とかで腹に手術の痕を残した

電車虎と蝶とを無事送り

あり蝶は無論夜の蝶である。短詩型の省略を心得た句。 虎は無論酔客で

61 00 間に娘の部屋にある香り

らさっと一刷毛に画いた水彩画の趣きであるとを神経の鋭さが拾い上げて句にする、上からえて微笑しい。見過されて居る一寸したこうり辺雑記の句にもそれなりに興味や共感を

景 は明治のままの 過疎の村

は鋭く摑んだ。 は鋭く摑んだ。 は鋭く摑んだ。 は鋭く摑んだ。 はい何と道理の合わぬこの現実を作者 は鋭く摑んだ。

火 (あぶりの刑にされてる外れくじ

面白いユーモアの利いた句になった。 ぶりで外れくじに対しての恨みも現わされて 単に外 れくじを焼くでは句にならぬ、

灰皿に恋の文殼焼く煙 で天位になった句が、 それが私の句であ

故人となられた藤木主税氏に紹介されて初め その時は私は後にふあうすと同人になり今は 二年ある小集の句会で初めて白柳に会った。

て知った。そのときの課題

「灰皿」に白柳

10

柳

線草、 ば長い川柳 刻に親しくなり川柳に熱を上げるにつれて白 くなり、当時住居も近かった関係もあって急 小誌川柳若葉、 たのが印象に残って自来川柳 復刊このみ、 生活であった。 川柳このみ、 川柳雑誌、 川柳塔、

一人であった友帆(故人)と私はよく作句の白柳の弟のこれも熱心な川柳家で川柳雑誌の 円満な人格に静かな幕切れであった。 始ニヤニヤ聞いていて最後は何時とはなしに ことで意見が違ってやり合ったが、 うな温顔で笑いの中に氷解して行った。 柳の上でよく異説があっても何時も春風のよ その間四十数年の想い出の 一度も口争いや口論をした記憶がない。 白柳は終 よく

になろうとは神ならぬ身の元より知るよしもで別れた白柳が四十数年の交友の最後の一期舞っていた白柳、会場の前で手を振って笑顔

舞っていた白柳、

のった。数日前の本社句会であれ程元気に振然に茫然自失一瞬全身の血が逆流する思いで

すの 知ら

せを聞

いた時の私の

菊沢小松園

無かったのである。

世に形影相伴うという言葉があるが、

昭和



して大和桜井に在って活躍している。 を見せなくなっ なって終った。 若葉時代の同人では雀踊子、 小松園のコンビが出来上ったのである。 たが、 満潮は今は句会もあまり顔 雀踊子は川柳塔同人と た記憶がない。川の中に白柳とは只 川柳国、三味 が忘れられ無 私位い 思え 掛けやというていた。 た。時々は空襲にも出合った。句 誘い合せて方々の句会へもよく出 時中も白柳、

不

のコンビは

掛 けて行 お

210

それ程大難小難を超越してひたむきな川柳へ そのままの切符で通った。それが所謂入井で雨が途中で降るとそのまま中止で、 襲警報が出てなかなか解けずそのまま帰ってた。時々は空襲にも出合った。句会最中に空 ってからの白柳の熱心さは我人ともに川柳の の関心は恐しい程であった。 たときも会えば早速句会へは一緒に行った。 帆をその弟をと三年間に四つの葬送を郷里の けというのであった。戦時中に父を亡くし ることのない程の執念の入れ方であった。 鬼と認めるところ東西奔走文字通り席の暖 石川県小松でやり心身ともに疲れて帰って来 来たときもあった。そんなときは今日は入れ 人間の生活の態度にも各人色々な形はあ 当時大相撲も晴天十日興行で 要は毎日を如何に生きるか、 殊に川柳塔とな の青天 入れ ま 友 掛

同郷のよしみ

若本多久志

も惜しいが自身としては悔いのない一生ではの意義がある。この意味で白柳の死は如何に何に充実した生命力を示すかという処に人生

あろうと思う。 実した毎日を精

悔のない毎日、今日只今を如 一杯生き抜くかということで

はやはり偉いと思う。中に一つのことを多年熱心にやり通したことつのことをも熱心にやり通せぬ人も多い世の と評していた、けれども今にして思えば只一 か、ただ川柳のためにこの世に生れて来た人 であろう。私はいつも最近の白柳の熱心さを 無かろうか!惜しまれて逝ける人は倖せであ この意味では好漢また安らかに瞑すべき 白柳から川柳を取れば何が残る

冷やかして、

30

すく 育って 近畿は 元より 四国に山陰に山陽 の人、とある。白柳の播いた川柳の芽がすく であろう。古川柳にも大石も敵討たねばただ あり、忠臣蔵の大石義雄も討入を果たさなか ことをやり通すことに人世を見出した好例で を終えた博士が外国におられる、人のやらん たなれば歴史の上に名は残らなかったこと 五十年間只一筋に便所の蛆虫の研究に一生 川柳人の胸に心に蘇る時、 白柳は決して

上に生かすことを心から契ってただただ合掌 することだろうとおもう。白柳の心を川柳の 柳を創ることこそ白柳が極楽浄土の上に成仏 を信じる。 われわれが白柳の骸の上を越えて立派な川 おのおののこころに白柳生き続け 小松園

> 白柳さんと初対面以来のことどもが、しきり しさを、しみじみ感じていた折も折、一入、 に同年輩の友人、知己が死んでゆくことの寂 についていたが、近頃、櫛の歯のかけるよう お葬式にも息子を代理に出して、四、五日床 に偲ばれてならなかった。 晩から、私は風邪が昂じて高熱に犯され、 清水白柳さんの訃報を理事長から受けたそ

ぜ 句会は初めてで、印象が深かった訳である。 ら、路郎先生や〇丸、紋太、三太郎先生など き、当時、金沢にいた私は、安川久留美氏か 思うが、犬山、すげ笠川柳社の主催で戦後初 への紹介状を貰って出かけた。 めての全国川柳大会が名古屋市で開かれたと それは、たしか昭和二十二年の秋だったと い八十名か百名ぐらいで、何百人も集まる 実はこのときまで北陸地方での句会はせい

H は白柳子)さんの方から、私の側へ来られて 出して、自己紹介をやったとき、白柳(当時 げた地方の柳友達が、それぞれお互の名刺を れ 0 たのが 自分は石川県の小松の者で…」と挨拶を受 たことも、何か奇しき因縁のようにも思わ る。その晩、 そのとき、路郎選の兼題が「初対面」であ 「同郷のよしみ」の始まりで、 宴会も終ってホテルへ引きあ

導を願って来た訳である。 二十三年間、先輩として、友人として種々指

とともに、 を選んでいただいたことは、日を経るに従っ 出版した句集は二回とも、白柳さんの温かい 雑の不朽洞会に入れていただいた手引から、 み」が肌に伝わってくるようである。 指導と援助を仰いだ。特に「老の坂」の題名 てあの句集とのふさわしさをしみじみ感ずる 私が大阪に出て来て、昭和二十八年 友情の厚さの中に「同郷のよし から

と、川柳塔社にとっても、惜しい人を亡った 塔の編集に対しては、実に公正な意見を出さ い傾向の句に対する研究に執心され、 尽きないが、とにかくよき先輩を失った哀惜 思う。以上、 れるその勇気には只々敬服の外はなかったと を買って出られるなど、その勉強ぶりと川柳 にも「九輪抄」の欄を設けて、自らその選者 ものだと、転々、感慨無量である。 また、 白柳さんは茲二、三年前から、新し あれてれと白柳さんの想い出は 川柳塔

川狂と名乗る白柳さん

栞

の樒はほとんど柳界の樒だった。 式に列席して、それが事実となった。 昨年十一月十三日、小春日和の午後、 白柳さんが歿くなった。 『白柳さん、只今より、 あなたが一 数十対 生かけ 告別 しか

った。やっぱり、白柳さんは歿くなったのであた。やっぱり、白柳さんは歿くなったので、声が咽につま来て、字がおぼろにかすんで、声が咽につま来て、字がおぼろにかすんで、声が咽につままで、実がおぼろにかすんで、 あとは言葉にならななかったら』といって、あとは言葉にならななかったら』といって、あとは言葉にならな 大好きな川 柳を読みます。これ 句

|柳さん 0 昭和二 年の句

が弱かったとは父に似

どなりたい気持で一杯である。知っておられたのだ。だのに、机を叩いて知っておられたのだ。だのに、だのに、何故 のときから、自分の心臓の悪かったことを、 塞であった。二十年前になくなられた次男坊 という句がある。白柳さんの病名も、心筋梗

出かけて行った。出かけて行った。地方の句会も、遠しとせずに夜行をかけてでも方の句会も、遠しとせずに夜行をかけてでもら川狂を名乗るにふさわしいものがあった。 だのだからとも言われた。俳優が舞台の上でものですと言われた。そして好きな道で死ん 白柳さんの川柳に対する情熱と執念は、 のですと言われた。そして好きな道で死ん 遺族の方達は、川柳のために死んだような

十一月十二日に。早く出来れば、七月十一日を出版することを決議された。目標は命日の もした。 武士が戦場で、死んだのも同じだと、お慰め 十二月四日 の常任理事会で『白柳遺句集』

> 申 の、路郎先生の 一忌に上梓出来るようにと

柳 さんを、お偲び下さることをくれぐれ 62 界の皆々様、 申し上げる次第でございます。 出版の暁には、 挙って、 もお 白

が十氏で十三句も載っている。こんなことは本誌一月号の川柳塔雑詠欄に、悼白柳の句 を意味するものでもあります。 人徳の到すところでもあり、同氏の柳界活躍 未だ曽てないことである。これは白柳さんの

も応えられなかった。 柳さんは、何度白柳さん、白柳さんと呼んで 0 包まれて、句帳片手に、遠く遠く旅立たれた であった。そして黄菊白菊に埋まった、 白柳さんは、錦繡の秋馥郁たる、菊の香に 白

菊の香に哽せたまいしか応らえなし 栞

ああ 白柳さん

大萬川柳会 川村好郎

新人の開発育成に尽さし、それを生き甲斐に めの川柳にとどまらず、 む人は多いですが、あなたはあなた自身のた 敬慕して止みません。と共にその事に喜んで されました。今あなたの急逝を悼むと共に、 白柳さん 世には自分一人の趣味として川柳をたの 柳社を超えて、東奔西走川柳の社会化、 川柳塔社を基磐とし

白柳さん

ありがとうございました。

尽すことを得られた晩年であったあなたを倖 せな方であったとうらやましく思うておりま

白柳さん

たの卓越した選眼と、容易ならぬご支援のお 名選として弘く絶讃され、今日の大萬川柳会 十八年継続して来た大萬川柳の前途をお護り を汚すことの無いようお導き下さい。そして ことになりました。どうぞ霊ながらもご功績 蔭と唯々感謝の外ありません。 創始者の故松 の発展を見る事を得ましたことは、全くあな して六年間引受けて下さいました。その間、 江梅里もどんなに感泣している事でしよう。 この度、私があなたの跡を継いで選をする 路郎先生ご逝去のあと大萬川柳会の選者と

白柳さん

員一同忘れられない感激です。お蔭さまでど 接せず、あの胸を突く選評が聴かれない事を えして早や六年。未だ一回も欠席されること て、第一回句会からあなたを選者としてお迎 れがせめてもの慰めであり、 指定席だった椅子は空席にしておきます。そ 一同寂しく思っています。あなたの句会場の しています。お喜び下さい。あなたの笑顔に 存じの通り基礎も固り、新進作家が次々誕生 なく、毎月懇切な指導を頂きました事は、会 どんぐり川柳会〇B会を大阪に設立しまし あなたをいつま

育ての親

玉造川柳会 西出一栄

来られた宮大工さんでした。

十七年前の或る日先生の隣りのご主人が、一十七年前の或る日先生の隣りのご主人が、「清水さんなア川柳を三十年余りもやったはるそうな、心ある人にやって貰いたいのやがるとで妹の清子とお邪魔するようになったのとで妹の清子とお邪魔するようになったはが川柳との馴れ染めでした。

先生は鉛筆と句笺、それに茶菓まで用意されて手ぶらで来る新米二十四名に、ねんごろれて手ぶらで来る新米二十四名に、ねんごろした。幼稚園より幼稚な者ばかりで先生の苦した。幼稚園より幼稚な者ばかりで先生の苦ながでおれば抜けました。

た。 生え 抜きが 私と清子と 二人になりまし遂に十人程になってしまいました。そして今遂に十人程になってしまいました。そして今

白柳先生の柳話と選の魅力に多数の有名作家万事お世話をやいて下さいました。最近ではって、発足当時以来見えていた柳宏子さんがって、発足当時以来見えていた柳宏子さんがので、発足当時以来見えていた柳宏子さんがして 句報が 発行されました。からほり 川柳して 句報が発行されました。からほり 川柳会と 昭和二十九年三月二十三日第一回川柳会と

オー

エスケー川柳会 大坂形水

大席、特別宿題の三句電話でご連絡があり、大郎がくと先生が家族の方に付添われて運びふりむくと先生が家族の方に付添われて運びふりむくと先生が家族の方に付添われて運びなんやと 病室へ運ばれる ところ だった との高話に寝耳に水とはこの事、ただ茫然という電話に寝耳に水とはこの事、ただ茫然という電話に寝耳に水とはこの事、ただ茫然という電話に寝耳に水とはこの事、ただ茫然という電話に寝耳に水とはこの事、ただ茫然という電話に寝耳に水とはこの事、ただ茫然という電話に寝耳に水とはこの事、ただ茫然という電話に寝耳に水とは、男子が変り、

次席、特別宿題の三句電話でご連絡があり、 家のセンスおしゃれな姑にしてくれる を天にとの事に、柳宏子さんは、最後の選の 天位が一栄さんになったのに因縁めいたもの 天位が一栄さんになったのに因縁めいたもの 天位が一栄さんになったのに因縁めいたもの 大空が一栄さんになったのに因縁がいたもの 大空ができまれているのを見て との事に、柳宏子さんは、最後の選の 大田の力ながりが今更おそろしいように 思われてドキリと胸が痛みました。 世間がざる客と路郎師うるたえる 十二月十日、白柳先生追悼句会を兼ねて、 十二月十日、白柳先生追悼句会を兼ねて、 中二月十日、白柳先生追悼句会を兼ねて、 大田のれてドキリと胸が痛みました。

幕切れの哀愁拍手に流される柳宏子

よき指導者だった

の午後、私は商売関係の会合の席に居た。白柳さんの悲報に接した昨年十一月十二日

「今、川柳塔から、白柳さんが亡くなられた「今、川柳塔から、白柳さんができない。会 頭がボーッとして人の話が耳に入らない。会 頭がボーッとして人の話が耳に入らない。会 頭がボーッとして人の話が耳に入らない。会 の終るのも待ちきれずに席を立って川柳塔の 事務所へ確めの電話をしたのであった。

白柳さんとは 戦前からの 知り 合い だった 白柳さんとは 戦前からの 知り 合い だった の私の尻を叩いて川柳塔社のメンバーに引 ちの私の尻を叩いて川柳塔社のメンバーに引 ちの私の尻を叩いて川柳塔社のメンバーに引 ちの私の尻を叩いて川柳塔社のメンバーに引 ちの私の兄を叩いて川柳塔社のメンバーに引 ちんことから交わりを深くなった。何んで そんなことから交わり、寝い先生であった。 自事、人の子・選及の 知り 合い だった 白い、良い先生であった。

川柳に捉えた世相など味わいのある面白い話 のなかった者までこぞって集まるようになっ のなかった者までこぞって集まるようになっ た。また白柳さんがちよっと手を入れると、 自分の句が見事な句に変るので皆も一層興味 自分の句が見事な句に変るので皆も一層興味 が乗って、句会の晩は先輩後輩の別なく、い が乗って、句会の晩は先輩後輩の別なく、い が乗って、句会の晩は先輩後輩の別なく、い が乗って、句会の晩は先輩後輩の別なく、い が乗って、知りに関心

場らぬ旅に立ってしまわれた。 者も現われ、白柳さんに喜ばれるようになったのに…、噫…何んとしたことか…、忽然と帰らぬ旅に立ってしまわれた。

昨年の夏、栞さんの句集が出た頃であったいたことと今にして思うのである。

あなたとわたし

こまつ柳壇 山上千太郎

和四十五

年新春、白柳居集り。

○一月十一日に久しぶりでこんな古い連中で ○御無沙汰致して居ります、古い馴染が集っ て古い話した興味尽きぬ春。菊沢小松園 それに魚住満潮、岩本雀踊子両氏連名の寄せ それに魚住満潮、岩本雀踊子両氏連名の寄せ

てありました。

前も昭和のはじめ頃、小松の三人組とい

われた松水、万魚(魚山の兄)兎月(干太郎)をが詩律会を結成したとき、白柳子さんの縁故。で、大阪に知己を得たのが、この寄せ書にあっていったのでありました。そうした時に、白柳子をんの実弟友帆、雀踊子外四五人の皆さんをれいたのであります。白柳居の集りの古い話しはその折の興味尽きぬたのしいものであったことと、当時を思い浮べて、私も懐古なったことと、当時を思い浮べて、私も懐古ないたったのであります。

好郎、摩天郎両氏の外、堺、富田林、どんぐ宿泊料金、句会の要項など知らせて頂きたい宿と乗り気になっています、日程は八月のおにと乗り気になっています、日程は八月のお盆を避けて第四日曜の二十三日とします。二盆を避けて第四日曜の二十三日とします。二盆を避けて第四日曜の二十三日とします。二公を避けて第四日曜の二十三日とします。二十二日、白柳さんから珍らしく四十五年六月九日、白柳さんから珍らしく四十五年六月九日、白柳さんから珍らしく四十五年六月九日、白柳さんから珍らしく四十五年六月九日、中間、

十二日午後出务分奏 7 札着:『町出身れは 行二十三日を楽しみにしていると書き添え りからも各二三人の同行可能性があります。 一とのようにして六月二十六日には、もう一 第二回川柳旅行の会」とした、こまつ柳壇と の交歓の日程予定表が刷りものとして送られ の交歓の日程予定表が刷りものとして送られ ので、の日程予定表が刷りものとして送られ ので、のまりの目ででは、もう一 ので、の同行可能性があります。 りからも各二三人の同行可能性があります。 りからも各二三人の同行可能性があります。

入院を知らせて参りました。あまりの事に、ろとも救急車に積まれ)の句によって急病、通知を心待ちにしていた折も折、(心電図もるので、参加の人員、乗物の時間等の決定のるので、参加の人員、乗物の時間等の決定の

それこそ私しも倒れそうな衝撃をうけました。あとのことは摩天郎さん外の交渉に当ら配を致しました。摩天郎さん外の交渉に当ら配を致しました。摩天郎さん外の交渉に当られた方々に何かとご無理申し上げましたが、おかげさまで、予定を越えた御参加を得て滞むなく交歓句会を終えることが出来ました。す。句会の日が白さん退院の日というのもただの遇然とはいえません。たくさんのお友達だの遇然とはいえません。たくさんのお友達だの遇然とはいえません。たくさんのお友達だの遇然とはいえません。たくさんのお友達ないました。

に感謝しています。当分静養―とわが事のよ次で八月二十七日、九月一日と音信があっ次で八月二十七日、九月一日と音信があっ次で八月二十七日、九月一日と音信があっなら次で八月二十七日、九月一日と音信があった。

介するはめになりました。川柳に生き、川柳介するはめになりました。川柳となった一葉を紹ました。私も、是非聞いてもらいたい、とありました。私も、是非聞いてもらいたい、とありました。私も、是非聞いてもらいたいととがあるので来松の節は、一日あなのからだを私あるので来松の節は、一日あなのからだを私た任せて下さいと申し送ったのでありました。

生々庵も弱り切っているので仕方なくボツボの高血圧、圭井堂の糖尿、薫風の入院などで「川柳塔もこのところ御難つづきです。好郎に寿命をちぢめた縮図をここに見ます。

堺柳界とのつながり

一日の堺吟行、三日の富田林市文化祭、十日ず、十月二十五日の岸和田市文化祭、十一月ツ出ている次第です。顔を見せると断り切れ

三日大阪府市文化祭と選者を引受けたりして日の堺市文化祭、十七日金八会四周年、二十

干

叱られています。十一月は遠出(墓参)など

だけは一泊予定で出かけます。今日朝から、 出来そうもありません。医者の許可で和歌山

しとしと雨。秋の雨はいやですえ。」 堺の藤井一二三さんから、白さんの訃をつ

うにあった怯えが、いま、私しが手にしていたえた電報に、私の、心の底に、しこりのよ

る、この一ひらの紙にあったのか。

白さんよ、私が聞いてほしいと、いったの

私の死後を頼みたかったのであります。

たから、白柳さんのやり方に全面的に支持し 受けずに、自分流の句を作るようになってい があったが私は自分なりに誰にも手ほどきを してくれる人があればと、いくらも思った事 のか、益々研究を加えられ一段と腕が冴えて と、なまいきな事をいったものだが、白柳さ って あまえさす 結果に なりは しないかなど 者を喜こばせはするが、ある意味では、 ていたわけではなかった。 んはその事も充分考えの中に入れて居られた ある時白柳さんに、この方法はなる程初心 私も初心の頃には、自分の句をアドバイス かえ たついでに私が堺へも来てくれと頼んだら、 錦綾会館の若芽川柳会に来てくれた。今度は 堺·若芽川柳会 八木摩天郎

や、他の柳誌からも望まれ、自分の職業は二 ら歓迎されたのだろう。あっちこっちの句会 さず、この人づきあいのうまさが、みんなか の次で、川柳の事には寸暇も惜しまずに働い こられた。 ほめる時にはためらわず、叱る時には怒ら

親しみのある選評 て、おられたように思う。 に、それなのに君は…。

柳界を 見まもってほ しいと言 いたかったの 郷土の先輩として、私の亡きあとの、こまつ

聞く事も出来ないのだと思うと、たまらない が、私を応援する意味もあって、益々熱心に に選者が変ってからの事だ。 に、もうあの解りやすい親しみのある選評を 選評を続けられてこられた。 んの急逝から、句会のバトンは私に渡された 意の選評を被露して居られた。その後梅里さ これが当句会の最大の名物になっていたの 南大阪川柳会へは毎回休まずに来られ、 柳の選者路郎先生が逝くなられ、白柳さん 南大阪川柳会との親密なつきあいは、大万

払っての活躍ぶりであった。

川柳会、鳥取川柳会、木次川柳会、こまつ川 只々淋しく号泣するのみとなった。たけはら

完成された句の良さなどを、

親切に説明して

に親しみを覚えるように、

じように、没句を取りあげて解明されたり、 た。逝くなられるまで続けて居られた事と同 なるだろう。当時白柳さんは玉造支部を結成

初心者育成の ために 努力 しておられ

私と白柳さんとの出合いはもう二十年近く

南大阪川柳会 金井文秋

めで、恰度七年くらい前である。その席上ま 寺で、私が頼んだ富柳会に来てくれたのが始 いきっと来てくれるようになったのは、光明 をされたのに始まるが、毎月、一、二回くら 系からの選者として生々庵先生と共に来て選 高須神社の第一回堺市文化祭川柳大会に川雑 柳界と白柳氏との関係は、二十四年前の

るが、 とそれぞれ快諾を得て、指導を願った。厳寒 である。好郎氏の力は勿論、堺も、 評は天下一品、川雑の至宝の折紙つきではあ 力してくれたのに、梅里氏死に、白柳氏死に て、弱体の私の身体を案ずる一念からよく助 酷暑いずれの日も欠かさずによく来て指導し は好郎氏、若芽は、梅里氏、富柳会は白柳氏 親となり、相談相手になってくれる人に、 の全く御蔭である。片親では育て難いので、 若芽の各川柳会もよく生い育ったのは白柳氏 の声も聞いて居たので大好評だったのは勿論 さんの句評聞きたいばかりに来ているのだと 勿論これは、路郎師の言われたように、句 川雑浜寺支部で他社の人からも、 富柳会も

29

の団体も好評で句評が人気を呼んだ。

行われ、堺と君のつながりも永久無限であろる筈の人が、もう来ない。淋しい限りではある。野球に沢村賞があり、久慈賞があるように、堺・若芽川柳会には永劫、君の功績を讃た、今後共「白柳賞」の名のカップの争奪がえ、今後共「白柳賞」を作って持って来てくれば必ず『川柳福引』を作って持って来てくれ 満南北忌句会、魚夜市川柳さんにお世話をかけた東 り団 会等必ず来てくれたり、今年も、 体のメンバー したう人の集団 数名引卒したその計画 世話をかけた事や、麻 堺古刹周遊 で、行く先々色々、 、今年も、新年句会に川柳会、文化祭川柳句、中で、一人の時代、食 めたのも 君が は、これら三 株生 良乃 先生 元々色々、白 君の人成 をと まや 0 ました。

ご承

知のように、

白柳調で

にくまれ人間白柳さん

福を祈るばかり。

呼もうこれ以上私は書けない。

柳 阿部柳 太

方でありませんから、ぜひお越し下さるよので、私と藤岡花梢が「八木先生は、そんなが、八木さんに悪るいのでね」といわれたが「富柳会ヘテコ入れにゆきたいと思っていが「富柳会へテコ入れにゆきたいと思ってい 毎月富柳会へ指導にきてくださるようになりれでは」ということで、それから白柳さんは う」と口を揃えて、おたのみしました。 会の 清水白柳さんは、富柳会の育ての親 生みの 、ます。 親が八木摩天郎さんなら、 昭和四十二 年ごろ白柳さん

2 3

ただ冥 のため、出句発表されていることは、うれしいことである」と感心して、ほめられたのでいことである」と感心して、ほめられたのでいことである」と感心して、ほめられたのでいことである」と感心して、「俺が死んだら『にくまれ口をいありまさんは、こんなことを話されたことがありまさんは、こんなことを話されたことがありません。「俺が死んだら『にくまれ口をいう女が、俺は、こんなことを話されていることは、うれしいことの減りよった」というだろうが、俺は で、しかも個評にしても、 当然のことだったといえましよう。晩年白柳句会や各支部句会で、優秀賞に潤いたのも で、作 会が富田林市公報紙に、防火や防犯運動協力若い人たちは集ってこないよ」とのべ「富柳 良さを広く世にPRする努力を、しなければ り法を考えねば駄目だね。それには、川柳の た。それをなくするには、もっと柳人の若返 酷使するところは、ないと思うようになっ さんは「最近私は、つくづく柳界ほど老人を が、 岡花梢を始めとして、 か な情 句勉 目に見えるようでありまし |強の熱が会全体に盛り上ってくる| |熱的指導を惜しみなくなされたの 『々の句に対しては、たい実に明解にズバリッと斬 柳会々員 へんて が本社

りこん 4 る、 Ę, けを求めようと、ふと見ると、白柳さんの目も途方にくれ、横におられた白柳さんに、助 だ。 設的 れて、うつむかれたので、いかな心臓男の 柳太はんが、うらやましいわ」と突然涙ぐま セスの千代さんが「私ほんとうに花梢さんや に、けむたいことですわ」といえば、 爺白柳と一緒に大阪に居ることは、ほんとう とです。私が冗談まじりに「このにくまれ親 私たちで、一夜柳談に楽しく過したときのこ を囲み、 ため来阪された、米子市の柳友八木千代さん いたことがありまし この人なればこそと、その 欲は持たないことや。これが一 てしまうだろう。それから、だ。それがないと、ただのに 川料理屋川富の二階で白柳さんと花梢と にくまれ哲学を、 道頓堀の ネオンの 灯が 窓から見え つなが た。 2 教えてくれたことも、 ていなけ 昨年夏、万博見物 言葉をしんみり にくまれ口 あまり小さな私 番肝腎だよ n 純情ミ に終 私 聞

語りついで「しかし、そのにくまれ口が建れているという事やから満足しているよ」 他人さまから存在を認め 俺のような、にくま ないだろう 存在 ę, もの、 私たち富柳会々員も、 す えらい目にあいよるで」と口とは反対にい もうちよっと向う見て物をいわな、 よって、ほんまに俺も困ってしまうたがな、 遠くから来よったあんな、 から「柳太はんは、 びっくりさせられました。数日後、 にもキラリと光るものを、 ねに新しい夢を持ち続けられた白柳さん。 べきにくまれ人間白柳さん。 目に浮んでくるようです。涙もろく、愛 にこにこ顔で話された 童顔がいまに 殺生な男やで、 この白柳さんを心の師 見たときは、二度 美人さんを、泣せ そして川柳に しまい わざわざ 白柳さん

ベレー帽もしやと思う人違い
うな丼で別れたままの阿倍野橋
お築へ一度来よと云ったきり
柳たいと思っております。

太

1

白柳氏を悼む

駒つなぎ川柳会 岸 南柳

突然の悲報に接し、唖然として、ピンと来ませんでした。三十五、五年以前玉造に居た頃、北へ二丁程の所に薬局で西田草薬さんと頃、北へ二丁程の所に薬局で西田草薬さんと頃、北へ二丁程の所に薬局で西田草薬さんとりがよりの人で当百さんと白柳氏も親しい仲でした。白此の当百さんと白柳氏も親しい仲でした。白此の当百さんと白柳氏も親しい仲でした。白此の当百さんと白柳氏も親しい仲でした。白いので、句会を致します時は玉造の男まえ理髪店に於てと案内状を出して寄り合ったなかに、路郎先生、豆秋氏、没食子氏、白柳氏、小松園氏など他にも色々の人に来て貰って句会を致したものです。

た。私の句に

た。私の句に

本当に 惜しい 人を なくして 終いました。私の句に

な事です。川柳界に取っても友人としても借い一同心から感謝した次第です。それが白柳い一同心から感謝した次第です。それが白柳い一同心から感謝した次第です。それが白柳い一同心から感謝した次第です。それが白柳い一同心から感謝した次第です。一般です。一般では、とても残念です。川柳界に取っても友人としても問い、本当に 惜しい 人を なくして 終いました。私の句に

では、 「雨宿り老いて旅路の物おもい」 でも感じる昨今です。

惜しい人

知三柳会 奴田原紅雨

過日、高知新聞紙上に寄せられた山路関古氏の「創作川柳の昨今」の中で、明治末期から川柳を終生の仕事として社会的にも灯をとら川柳を終生の仕事として社会的にも灯をとら川柳を終生の仕事として社会的にも灯をとら川柳を終生の仕事として社会的にも灯をとられた山路関古しようもない。

ん。その白柳さんとのおつきあいは私が身辺ほど 高知の 同志からも 慕われていた 白柳さうちの者より小さい時があると注意を受けるうちの者より小さい時があると注意を受ける川柳「高知」の仲間の一人から、毎月句評

昔の発表してない句ばかりですが、

読み返

香

林郎

老らくの恋ならなくに髪染めて白髪染新地で下りるつもりらし君もかとニタリと笑う白毛染

午後三時電気バリカン快し

白柳子

フケかくに手加減をする散髪屋

の都合で川柳塔同人を辞した頃から急激にはの都合で川柳塔同人を辞した頃から急激にはするない。 私も時々句会に出てもよいと医者のせます。私も時々句会に出てもよいと医者のせます。私も時々句会に出てもよいと医者のから、来年は四、五人で高知へ行きますというら、来年は四、五人で高知へ行きますというら、来年は四、五人で高知へ行きますというら、来年は四、五人で高知へ行きますというら、来年は四、五人で高知へ行きますという。

(高知新聞柳壇選者) 孫泣いてわが家は春を豊かにす 甘えないので逆のこと言ってみた 甘えないので逆のこと言ってみた はのないポケットなのさ稼いでも をの中の女は脱いでいる

川柳わかやま吟社 垂井葵水ぼくに川柳の目を

あり番傘ありの呉越同舟(?)で、後日白柳の報が入ったのである。急拠、栞先生が馳けら柳先生に声をかけた処、句会二日前に入院白柳先生に声をかけた処、句会二日前に入院的表に方をかけた処、句会二日前に入院の報が入ったのである。急拠、栞先生が馳けら柳た生に声をかけた処、私のビル新築落成を和歌山の柳友諸氏が、私のビル新築落成

訃報の『遠因』になったのではなかろうか…たよ」と喜ばれていたが…それがあの突然の ったが、体に何ともなかったから自信がついいわれるのを「泊って戴く」ことにして強引いわれるのを「泊って戴く」ことにして強引退院直後だった。「往復四時間は無理だ」と と、還えらぬ事ながら慙愧に堪えないのであ 先生に報告すると「折角交流句会の機会を持 にした。そしてその第一回のとき、先生は たのだから続けて見ては…」というご意見 "川柳わかやま"と銘打って月例会とする

むろん初対面の白柳先生のお目に止り、一席で誘われ、生れてはじめて作った『川柳』がいう和歌山短詩型文学クラブへ野次馬的興味私が「俳句と川柳と同席句会をしている」と なしの淵に追い込まれて終ったのである。生の巧みな誘導に乗せられて、川柳という底生の汚い知れぬ人間味に野次馬根性を返上、先の荒い知れぬ人間味に野次馬根性を返上、先の不覚で、その後毎月お目にかかる白柳先生 二席とを獲得した。「ナーンだ、川柳ってこ んなもんか…」とタカをくくったのが、生涯

這い上かれたかも知れないのに…。 のです。もう少しお手を拝借出来たら淵 生は私をおっぽり出すように逝かれて終った けて!」とお縋りしようとしているのに、先 かやま」を何とか歩み初めるために『先生助の中で浅学の私がアプアプしながら「川柳わ 担当するときも先生にケシかけられ、深い淵 から 親しまれておられた事を、私は誰れよりも知 っていましただけに、 国、四国柳人の総ての方から流派を越えて、 席 る温い教えを受けて参りました。 戴いていました近県大会を通じまして、中先生のお人柄は教室を通じ、また毎年ど出 "たけはら"にとりま

い上かれたかも知れないのに…。

私のために差しのべて下さい。 先生、 どんぐりの転げゆく先みうしなう 葵 天上からもう一度、あたたかい手を 水

先生と、たけはら、

たけはら川柳会 山内静水

て下さらない白柳先生…… にでも出かけられるように、もう還っては来 れ た先生。あまりにも遠い、遠い旅に、吟行 も誘われないで、ひよっこりと旅発た

る。

俳歴二十数年(勿論途中休憩の方が長い)

くのご因縁と合掌致しました。 今日がご命日の十二日であった事も、よくよ 書くことの苦手な私が重いペンを執った、

いました 関係で、 例会日までには 必ず 送稿思います。秀吟に対し毎月持廻り楯を贈って でと、あらゆる手段を尽されての長期にわた を。その間速達で或る時はど旅行先から電報 べるまでもなく、皆様もとくとご承知の事と 来七年数カ月、そのご指導ぶりは私が今更の 句教室担当を進んでお引受け下さるなど、以 流が深まり、昭和三十八年四月からは当会作 先生とのご縁は、同人推薦を戴き一層の交

二年前、私が朝日新聞和歌山版の川柳欄を

の淵に追い込まれて終ったのである。

しても、先生のご急逝はあまりにも悲しく、 して先生のご存在があまりにも偉大であった

惜まれてなりません。 だけに、今後の竹原はもとより柳界にとりま

ち当り、如何なる試練にも耐え抜く努力を成 来ないと思います。 私達は 頑張って 生きま ていては、白柳先生のご意志を継ぐことは出 さねば成らぬからです。しかし嘆き悲み迷っ います。それは私達一人一人が進んで事にぶ いふらされていますが、私は果してと思って "親はなくとも子は育つ"と昔からよく言

67 守っていて下さい。時にはお父さんと呼んで みたかった白柳先生。私達は忘れてはならな 何時までも何時までも、いたけはらいを見 白柳先生やすらかにお眠り下さい。そして (合掌)

清水白柳先生を憶う

むらくも川柳会 藤井明朗

えぬ雲の上の人になられた。まだ十年は川柳 のため活躍、 み深いやさしく話しかけられる先生、もう会 生、ほんとに惜しい人を失くして、無情の世 さ、わびしさを噛みしめている昨今である。 をうらやむ事しきりである。人間のはかな 昨年晚秋、十一月十二日急逝された白柳先 思い出は走馬灯の如く、快活な温顔、親し 指導を望んでいました。川雑時

柳話、披講には出席者は深く印象に残ってい も尼緑之助主幹の還暦記念川柳大会に出席、 代から、また昭和四十二年十月十五日、いず えて頂きました。その楽しいムードは昨日の の観桜川柳大会へ大挙十四名のリーダーとし てご出席になり感激新たなるものがあった。 大会は六十余名の盛会となり、錦と華を添 昭和四十五年四月十二日島根県木次町

す。 いる。 は楽しい。題「健康」(むらくも) でした。 集い話の尽きる事なし春の宵を満喫したもの 夜は温泉郷清嵐荘で松江、 今も先生の面影をしのんでお声を聞いて ふと笑いさえてばれる先生の披講ぶり 私は先生の録音テープを持っていま 木次の柳人と相

ように思えて忘れ得ぬ花の一日でした。

この "丈夫で長持ちだけがとりえにされた妻" "健康な夫で荒い人使い"

居りまえん、でも八百長見たいでんな」笑い まへん、八百長やったかて、一銭にもなりま 先生が「また大阪かいな。でも八百長ではお へんさかい "健康な若さが明日を考えず" 会場朗笑の渦! 大笑い――汽車の中でも見て 美 代

録音があり先生を偲ぶ今日 謹んで先生のご冥福を祈ります。

朗

いが起る。 時声あり、 八百長がはやりますね。 笑

明

詞

文学クラブ和歌山短詩型

われて寒天に砕けるよう を敬慕し哀惜する私達は れなければならない。先 き指導をつづけられた。 れ五年に余る当句会の良 生あなたという支えを奪 麻生路郎先生の後を継が ここに先生と永久に別 思いおこせば今は亡き

き友でもあった。 あなたは私達の良き講師でありそうして良

はあなたが知ってくれるであろう。 がたいが、あなたに遺された私達のさびしさ いる私達は、 って私達の亡びぬ時もやがて来るであろうー い。あなたの文学は永久に生き、 信頼はあなたの死において絶えるものではな 達の心を霑すのをひそかに感じました。 た。喜びにつけ悲しみにつけあなたの徳が私 としての顔をあなたは見せたことがなか 歌山短詩型文学クラブの良き講師であり講 から最後迄続いた。その生涯の一端を我が 柳歴五十年を越えたあなたの作家生涯は最 あり、誠実であったからだ。 私達は先生との生きた縁を幸とする生きて 先生は川柳作家として慈愛があり、 所詮あなたの死をまことに知り かえりみれば それに随が 2 和

座いません。 は、私達会員は肝に銘じ終世忘れる事では でいつも魂のある句を作れとおっしやった事 私達に感じせしめた私達に生きて二度と他で 皆をみつめていた眼差は無限のなつかしさを めぐりあえるであろうか。先生は私達に例会 先生が最後になった運営句会の時、 無言で

1/2 たします。 先生の御魂安らける事を信じて追悼の詞と

哀悼の樒がならぶ清水家 追

45年12月2日、 追悼句会の弔辞から

生きのいい蟹だとむごいことを言う米価据置老の勤労感謝せず 本心をかくせぬ損な生れつき 妻よ子よ任せて欲しい力瘤 メロジーに酔うて二人の恋すすむ 退院の片肺同士 空の青さだけが左遷に味方する 捨てた村へムチ打症で舞戻 横槍をかるく無視する多数決 近道をゆき人生を踏みはずし 妥協する勇気を依怙地見失ない 女房に財布持たせて菊の趣味 喪があけて子 冬の旅帰らぬ旅路息凍る 据置老の勤労感謝せず 柳師の 霊に(一句 のない顔は石に似 親である 鳥取県 松江市 広島市 1 3 槙 村 松 木

英

詩

夜更しと早寝と添うて四十

思い

出の旅はみかんの味の中

北川春巣選

酔 村 諷 子 歩 霧晴 短 告白にアドバイスして送り出 恋愛論戦わしても子には負け 我が家春 購買心そそる師走を耐えて行き 一目ごと安らぎを編む妻の幸 鏡の曇り拭いて女にかえる夜 生きる嘘いか程胸に厚化粧 いつの日か別れ 玉子酒下心あり劾いてこず 白柳師を偲び なるもののあわれさ花供養 のベレーその微笑さえも雲の峯 れ て灯は美 色紙短冊 る心用意する しき魔性持つ 初砚 大阪市 八尾市 L 江 高 野 城 杉 修 Ŧ 君 子 史 歩

| 人生はドラマ我が道行くと決め ・ 八代市 船 ・ 満濁を飲んでヘドロの海となり ・ 迷惑な話労組が肩を入れ ・ 迷惑な話労組が肩を入れ | 馬鹿でよし正直者で行くと決め 例えばがエスカレートしてもめ続け 選暦の妻にやりたい努力賞 ポープ | 心までかくさんとてか女塗る東になって銅貨のごとく立ち向う森になって銅貨のごとく立ち向う学歴のとおりのイスが待っていず | 大阪市 阪の日何やら佗し畑にいての日何やら佗し畑にいての日何やら佗し畑にいて | 島根県 安 が酔うてて話またこじれ が出は捨てて再婚同士なり 気が酔うでで話またこじれ |
|---|--|--|--|--|
| 木 | 田 | | 上 | 達川 |
| 史 | 竹 | | + | 潮 洋 |
| 朗 | 馬 | | 止 庵 | 音々 |
| ではけな名をおしむなり日の暮るる ではけな名をおしむなり日の暮るる ではけな名をおしむなり日の暮るる | 薪を割る音おこってるおこってるめなにを病む瘡ぶたのごと錆て 竹原市 三 宅 | ハイミスの意地を縫いこむミシン針木枯しビュービュー頭も懐ろも空っぽ 冷水マサツしても集金あつまらず 岸和田市 福 浦 | 秋風へ大輪逆らうすべもなく 一 | 大阪市 小 谷 大阪市 大 本 |
| 豊 政 | 不 | 勝 | | 葉バッ |
| | | | | |

| 達筆の便り老眼ちと疲れ | 大阪市 花 | 父親の退職金で乗用車 | 再会の老を語らず手を握る | 割勘でのんで介抱させられる | 鳥取県 林 | 球根に名を添える等と春を待つ | 男の隙はバックミラーを覗くとき | ワンマンを素直に受ける妻となり | 大阪市 小 | 国のケチなじり募金へ背を向ける | 忠臣蔵に共感汚職の有るかぎり | なわのれん愚痴も肴になる師走 | 大阪市 藤 | ねんねこの下からミニの足が生え | 泣きわめく子に手を焼いて母憶う | 大物は手入れときいてうろたえず | 松原市 守 | さりげなく別れるつもりの距離にいる | 月末のくらし乗り切る目玉焼き | 愛つなぎとめる手段へ妥協する | 東大阪市宮 | コンコース同じ訛で列が出来 | 雑用はみな引受けて生字引き | うまい汁すわせる話すぐこぼれ |
|---------------|--------------|------------|--------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|------------------|-----------------|------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------------|----------------|----------------|--------------|---------------|---------------|----------------|
| | 田 | | | | | | | | 出 | | | | 田 | | | | 屋 | | | | 西 | | | |
| | 繁 | | | | 露 | | | | 智 | | | | 頂 | | | | 万 | | | | 弥 | | | |
| | 子 | | | | 杖 | | | | 子 | | | | 留子 | | | | 竿 | | | | 生 | | | |
| 税務署に隠す帳簿の無い不洗 | 働けど不渡り手形だけ残り | 和歌山市 田 中 正 | 8 | しとしとと雨よ孤独を愛すのか | バラ咲けど病友は本日手術なり | 竹原市 生 信 笑 | 列車のトイレで女性化けて来る | ふるさとの立派になった火葬場 | マキシ攻勢エレベーターガールから | 大阪市 堀 口 欣 | あぐらで書いた書初め正座して眺め | 楽させてやりたい母をまた泣かせ | 胃カメラに保証をされてはしご酒 | 輪島市 山 元 無 | 初恋の人は会釈もして呉れず | 海鳴りが心の傷へ鳴り続け | しあわせの中でストーブもえ続け | 今治市 渡 辺 南 | 発表会はりきりすぎた平社員 | 底力まだ出し惜しみ平社員 | 休まれぬ事が自慢の平社員 | 大阪市 西 本 保 | 前無論うしろ姿も老けた友 | 便りせず便り待ってる虫のよさ |
| | | 夫 | | | | 子 | | | | 12.15 | | | | 限 | | | | 奉 | | | | 夫 | | |

| | 祝電の一つ新婦の胸を打ち 舞扇きらびやかな道きびし 舞扇きらびやかな道きびし 岡山市 谷 森 和 の大人にされて反抗期 子供にされ大人にされて反抗期 | うて来た余情に | その人と逢うときネオン呼吸する 失言を取消す顔は別に持ち 残酷な審判花びらむしりとる | 和歌山県 ふきあげ もかが詩に残した夕日見てる人を磨く かるさとに母あり豊かなる安堵 | 死亡事故のの活字の意張りよう 一日のうさをおでん屋受けて立ち 一日のうさをおでん屋受けて立ち 山田のうさをおでん屋受けて立ち ボール かっぱい かんしゅう はんしょう アル・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス | |
|---|---|---|--|--|--|-------|
| 度子術入院 10 10 10 10 10 10 10 1 | 44 | | 正与 | 元 | r) IX | |
| 広島県 南 条 露門手術入院 二の胃へ一人前の膳がくる にへ妻の喜こぶ顔哀れ にへ妻の喜こぶ顔哀れ る里へ帰る車中に時計巻く る里へ帰る車中に時計巻く る里へ帰る車中に時計巻く がっかいて愛の破局くる 取りへ女ではない眼の配り 新宮市 大 矢 十 布がかわいて愛の破局くる 取りへ女ではない眼の配り 大阪市 河 原 林 比 呂り敷いて銀杏並木が明るい日 やの眠るバックにオリオン座 引きした分修繕で取り返し | 風 | 治 | 翠 | 城 | 動 孝 | |
| 呂 | 引きした分修繕で取り返しの瀬が素足にさせた大掃除の敷いて銀杏並木が明るい日り敷いて銀杏並木が明るい日の敷が素足にさせた大掃除。 | 去にのみこだわり出世せぬ男いたくな匂いさんまを焼く煙りりあまる米を買うにもある闇値 | 転に無縁地下足袋つきまとう取りへ女ではない眼の配り | 葉踏んで測量団が去り の座を離れて山の湯にひと日 | 室妻おろおろして哀れなりの胃へ一人前の膳がくるの胃へ一人前の膳がくる | 広島県 南 |
| | 国 | 止 | | + | 柳 | 露 |
| | 彦 | 水 | | 郎 | 子 | 声 |

| 敷布団ここが砦のように病むりまぬけど夫には気兼ねないし瓶島根県堀江芳場場県堀江芳 | 一目惚れしたとチップをはずんどき大阪市 水 谷 竹 | 現代の歩巾に古風あわし兼ね親しさは窓から結構用がたり | NHKのストにニュースとして言わず網つくり蜘蛛は超勤意識せず | 朝訪えば着ぶくれ亭主顔を出し 羽咋市 三 宅 ろ油差すつもりで肝油飲み始め | 揉めている内に次の子身籠った 変められて趣味の楽焼高くつき の発売 原 田 輝 | 七五三お宮さんから宣伝車事前運動と知ってて義理の顔を出しお抹茶が変色してるほど多忙 | 今治市 古 野 伶 |
|---|--------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|---------------------------------------|---|---|-----------|
| 73 | 125 13 | | 太 | 50 | | | |
| 子 | 子 莊 | | 楼 | 亭 | 親 | | 人 |
| 朝だけは若い歩調に合わすパン 歩年の凧天と地をひとり占め 大阪市 里大阪市 里 | アニマルと云う名で日本株を下げ 句作りの支えの折れてわれ孤独 | 存せもアドバイスもある暦 体がらわず真紅に炎えて生きんとす | 奉賀帳ケチが物言う筆初め ・ | 梯子酒電光ニュースにハッとするセールスは逞し名刺の裏表 | 心にもない微笑鏡に送る 大尾市 松 | 栄転はコンテナ山と積んで置き 柿の収穫枝も土産の中に入れ | 河内長野市 森 |
| | 本 | 井 | 織 | 森 | 高 | 田 | 本 |
| 小 | | 露 | 文 | 孝 | 秀 | めぐ | 黒天 |
| 路 | 峠 | 芳 | 子 | 華 | 峰 | 3 | 子 |

| 愛媛県 小笠原 仲 美 | るだけ貯 | 生存のはげしさ心に墨をぬる. | 富田林市 木 村 弥栄子 | 多きしわより深くして孫を抱く | 孫の為きこえる耳が欲しくなり | 大阪市 柳 原 静 香 | 温度計眼とすって見る寒さ | カレンダーも寒く震えている師走 | 鳥取市 近 藤 秋 星 | 共稼ぎ人妻らしくない女 | 夕陽恋う自由の持てぬ職に生き | 松江市 内 藤 喜 夫 | 小商人只食うだけと年の暮れ | ついて無い男漫画によく似てる | 和歌山市 吉 野 富 子 | 逆境へ同情快哉が同居する | 川も水調整寒へ身構える | 兵庫県 高 橋 近 江 | 終着駅の窓の灯りか養老舎 | メロドラマまたすれちがう船が出る | 大和郡山市 森 田 カズエ | 来客へ隠す物なき貧しさよ | 笑顔とは別の社長の一寸来い | 羽曳野市 麻 野 幽 立 | |
|------------------|-----------|------------------|----------------|----------------|----------------|----------------|--------------|-----------------|--------------|-------------|----------------|--------------|---------------|----------------|-----------------|--------------|---------------|----------------|--------------|------------------|---------------|--------------|-----------------|--------------|--|
| ケンガイのくねって蝶へさそいかけ | 和歌山市樫村ふみよ | 墨痕淋漓かすれるとこへ来でかすれ | 奥様の見栄セールスは見逃さず | 大洲市 堀 内 暁 風 | 追し越してみたが学閥ある会社 | 籠の中なれどインコの睦まじく | 大阪市 白 石 良 圭 | ネオン浴びホステスに聞く人生譜 | もう歳と思い何糞とも思い | 守口市 野 呂 杜 月 | 美人から声かけられた忘れもの | 人事課に優先権がある美人 | 尼崎市 中 谷 利 美 | 口ぐせの古い洒落出て母達者 | コンピュータに計算させた顔の艶 | 和歌山市 垂 井 千寿子 | 人間を見る目が古い枠にあり | 日やといの夫婦日輪押してゆく | 岡山県 武 内 雅 堂 | わが春と瑞穂の国の豚の声 | 恋を得てゲバ棒捨てた彼も人 | 堺市栗 本 藤 持 | 山売った金とは言わぬインテリヤ | 営々と築いた家がもめ初め | |

| どもるのが一番頼りになる男 | せめてもの亡母に会う日だ腰のそう | 鳥取市 山 形 春 | トイレ立つ間合いをじっと聞いている | 忘られし人形夜露に目が光り | 堺市羽田一 | 平常はサボリ年末ストライキ | ボーナスだ差額だ労組の決算期 | 仙台市 川 村 映 | 下を見て暮らそと不憫な妻が言う | 子の嫁に欲しいナースの世話になり | 熊本市 高 野 宵 | ハイミスの縁談理想が妥協せず | 縁談をみくじの吉がはかどらせ | 島根県 中 島 英 | 子の便り無理はするなと二三行 | 人生の疲れへほしいエネルギー | 鳥取市 有 田 鹿 | 着飾って他人行儀の妻になり | 鉢植えの小さな秋を慈しみ | 愛知県 青 山 久 | 病室の窓は師走を知らぬ顔 | 後押しのない坂道の程遠し | 竹原市 楠 貞 | 雨だれのような話に退屈し |
|---------------|------------------|---------------|-------------------|---------------|---------------|---------------|----------------|-----------|-----------------|------------------|-----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|------------------|-----------------|---------------|-----------------|----------------|--------------|-----------------|--------------|--------------|
| | | 16- | | | | | | Live | | | -11- | | | | | | 0 | | | -75. | | | | |
| | | 海 | | | 扇 | | | 輝 | | | 草 | | | 子 | | | 子 | | | 春 | | | 子 | |
| 東大阪市 斎 | 三弦の上手な娘も縁遠し | あの世への土産話は多すぎる | 大阪市 今 | 菊日和まず懐をたしかめて | 挨拶の仕方で好きな人と知り | 大阪市 大 | 便乗の車故障で後押しし | 布 | 大阪市 岡 | 夢で見し亡き女房のたよりなさ | 老人だけがユックリあるく年の暮 | 大阪市 広 | ガムに似た永くは味のない男 | 正月は孫が来る来るヘソとりに | 大阪市 鈴 | 一人ぼちあくびしている事務のひま | がむしゃらに働いた過去笑い合い | 高槻市 山 | 偉くなったような錯覚自動ドアー | 湯上りに密柑がうまい伊予育ち | 今治市 今 | プレゼント呉れる娘が居る誕生日 | 贅沢なストする空の運転手 | 今治市 伊 |
| | | | 1 | | | | | | te-d | | | 1-1 | | | 4.11 | ま | | 141 | | | 1) | | | 625 |
| 藤 | | | 井 | | | 西 | | | 部 | | | 畑 | | | 木 | | | 田 | | | 井 | | | 藤 |
| 三十 | | | 隼 | | | 為 | | | シ | | | 賛 | | | 生 | | | スミ | | | 松 | | | _ |
| 四四 | | | 人 | | | _ | | | ゲ | | | 平 | | | 仏 | | | 子 | | | 花 | | | 郎 |

| を | 横高 薫風著 「れもん」 西尾 栞著 「水鶏笛」 | 赤い羽だけは値上げをせぬ日本 菊人形花の着物で晴姿 | 野不二 | 9 | 東大阪市 落 合 思 月 | 林道の虫はキレイな声で鳴き | 諫早市 原 田 明 春 | 横向けばお金取られる十二月 花火散る散るいくさなき平和の | 大阪市 岡 本 まさひろ | 定退の立派な髭がおしまれる | 笠岡市 山 本 柏 生 | 公害で育ち煙に不感症 | 宿毛市 山 本 窓 花 | よくできていました鑑査ほめてくれ スモッグに百万ドルの値が下が | 竹原市 簑 田 浄 美 六 甲 山 | 中古車をもった年増がのせたがり | 紅葉狩心の旅路ですましとき | 大阪市 木 村 浊 水 | 独房の窓にクリスマスジングルベル 言い訳は妻ひきうけて無事にすみ | 月刊の大信言できるし次にとせる。 |
|-------------------------|--------------------------|---------------------------|-----|----------|--------------|---------------|-------------|------------------------------|--------------|---------------|-------------|------------|-------------|---------------------------------|-------------------|-----------------|---------------|-------------|----------------------------------|------------------|
| 村 木 松 静 竹 大 高 り 丹 東 み 小 | | 物で晴姿 | 大阪市 | 心にさもしさ残る | 大阪市 | ツ手応えない軽さ | 大阪市 | いくさなき平和の | 高知市 | 世代に弱く折れ | 泉佐野市 | に祈る目が注ぐ | 和歌山県 | 万ドルの値が下が | | 京都市 | 木馬音はずむ | 島根県 | きうけて無事にする | 亲写古 |
| 島村岡崎工岸羽浦山 | | | | | | | | 詩 | | | | | | 9 | | | | | み | 力 |
| | | | 秀 | | 久 | | | | | | 静 | | 桐 | | | 柳 | | 福 | | |
| 秀 久 静 桐 柳 福 | | | 村 | | 子 | | 進 | | 寬 | | 子 | | 蔭 | | | 草 | | 子 | | ılı |



白柳さんもう返事のな

- 痛恨の昭和45・11・12

東野大八

清水白柳が死んだ 知らない男が死んだ 川柳でしかものを言えない男が 死んだ 「川柳塔」の為に、本当に惜しい人を でくしたものである

作二郎

ついていく

黙って拝借したことを作二郎さんにおわび右は、墨作二郎さんのお便りである。

しい姿にやたらと気をつかって腹をたて、伊

梅志さんの発刊句会では、梅志さんの痛々

わけである。

表のところ、白卵さんとは2つ切付面でつのっけてトコトコと歩いてござる。 て、少々やぼったい色さめた小豆色の帽子をて、少々の中に今も白柳さんは、あの古ぼけ

実のところ、白柳さんとはいつ初対面だったか、覚えがない。わては、河内の百姓でんたか、覚えがない。わては、河内の百姓でんたか、覚えがない。わては、河内の百姓でんたか、覚えがない。わては、河内の百姓でんたか、覚えがない。わては、河内の百姓でんたか、覚えがない。わては、河内の百姓でんたか、覚えがない。わては、河内の百姓でんたか、覚えがない。

というのが、私への最後の便りになった。と思ってます」と思ってます」と思ってます」といるが、そろそろ句会歩きもやろうかと思っては、ぜひ参加させて下さい。身体もどう

胸をしめつけられる想いだ。 、本当に得難い人材をまた亡くしたのである。私はいまも、どうしようもない寂しさでる。私はいまも、どうしようもない寂しさであ、本当に得難い人材をまた亡くしたのであき楽しげに繰っていた白柳さん。「川柳塔」勢の大陸同窓会では、柳人の生年月日のメモ勢の大陸同窓会では、柳人の生年月日のメモ

ああ白柳さん

吉田水車

清水白柳さんの逝去を知らされたのは昨年十一月十七日の朝のことであった。去る六月十四日伊勢での大陸川柳人同窓会で実に久々十四日伊勢での大陸川柳人同窓会で実に久々お会いした、その時「私は大陸には関係はなお会いした、その時「私は大陸には関係はないが一度顔を出さんとわるいと、おもうて…

日柳さんと私の交友はまことに古く私が川白柳さんと私の交友はまことに古く私が川 作家として(当時の号は白柳子)その折からなかなか世話好きで毎月欠かさずに自宅で何なかなか世話好きで毎月欠かさずに自宅で何なかなか世話好きで毎月欠かさずに自宅で何なかなか世話好きで毎月欠かさずに自宅で何なかなか世話好きで毎月欠かさずに自宅で何ない、時折いただく雅信の中には必ず本誌の発展上の抱負などをもらして来られた、その熱展上の抱負などをもらして来られた、その熱展上の抱負などをもらして来られた、その熱していた。

て心から氏のご冥福をお祈り申しあげる。もい出の数々はつきないが匆々の粗辞を呈しもい出の数々はつきないが匆々の粗辞を呈しひそかに推察申し、本誌も、これからの秋に

君が名も悲し名簿に朱を入れる 水

車 掌

白柳兄さん

ないものであると胸に一撃をうけた。うことだった、びっくりした。人生とははかげると、いきなり白柳さんが亡くなったといけると、いいっとり白柳さんが亡くなったといいないがけたたましく鳴った、とりあ

思えばついこの間太路さんの句集発刊の会に来ていただいたのが最後であった、あのとき私をそばへ寄せて白柳さんがいわれた一語がまだ耳の底に残っている。
「なあ芳川や、達者や思っても人間はやっぱり生ま身や、気をつけんとあかんで、えろう元気そうな顔しているが、ええ気になっろう元気そうな顔しているが、ええ気になっていたらあかんで、ほんまや病気になると人間ももろいもんやで」こんな言葉がまだ私の目ももろいもんやで」こんな言葉がまだ私の目ももろいもんやで」こんなことを生

して柳社を超越してのながいおつき合いである、まだ白柳さんとの出会いであった。こうと白柳さんとの川柳の出会いであった。こうと白柳さんとのがあった関係で、近くでその近くに愚弟の家があった関係で、近くでその近くに愚弟の家があった関係で、近くでその近くに愚弟の家があった関係で、近くでその近くに愚弟の家があった関係で、近くでその近くに愚弟の家があった関係で、近くでその近くに愚弟の家があった関係で、近くでと自称さんとの出会いはもう十数年前になと白柳さんとの出会いはもう十数年前になる、まだ白柳さんとの出会いはもう十数年前になる、まだ白柳さんとの出会いはもう十数年前になる。

福を祈る心で一杯である。 兄であった。白柳さんはもう居ない、ごめい 白柳さんは私の実の兄の如く、また川柳の

(番傘川柳本社同人)

白柳さんの死を悼む

福浦勝晴 に対していたが、その後回復され、去お知らせに声も出なかった。 かねて心臓がおたとはいていたが、その後回復され、去お知らせに声も出なかった。 かねて心臓がおた生から清水白柳さんのお亡くなりになったた生から清水白柳さんのお亡くなりになったた生から清水白柳さんのお亡くなりになったた生から清水白柳さんのお亡くなりになったた生から清水白柳さんのお亡くなりになったた生から清水白柳さんが、その後回復され、去がいたが、というない。

代表するような温厚篤実型の好々爺、清水白代表するような温厚篤実型の好々爺、清水白代表するような、お見掛けは現がそのまま当てはまるような、お見掛けは現がそのまま当ではまるような温厚篤実型の好々爺、清水白

白柳さんを初めて知ったのは、川柳 "さつ白柳さんを初めて知ったのは、川柳 "さつらまい人だと思った。気取らず高ぶらずの説で、白柳さんの柳話をお聴きして、実に話ので、白柳さんの柳話をお聴きして、実に話ので、白柳さんの柳話をお聴きして、実に話ので、白柳さんがと思った。気取らず高ぶらずの説がまい人だと思った。気取らず高ぶらずの説がまい人だと思った。気取らず高ぶらずの説がまいた。

せんばの句会で―― いつだったか、私がまだ川柳初歩のころ、でゆく話法は、さすがであった。

という句を作ってから、ふとそのあとでしたいう句を作ってから、ふとそのあとでしたっても、そんな句を出句すること自体が白なっても、そんな句を出句すること自体が白なっても、そんな句を出句すること自体が白物さんを含む世の建築業者さんたちをおよそ侮辱する句だと悟り、私は自分の非礼とナンセンスと軽そつさを極度に恥じらいながら、たつ心じくじとして、いったん出句したものをあわてて取戻しにいったまずいエピソードがある。

中庸のものばかり。したがって、作風は本格が示すように、総じて川柳の本質を忘れない白柳さんの作品は、そのおだやかなお人柄

になったんやとまた私の胸をつまらせる。私

いたよ」とおっしゃる。それがもうこんな姿そうやそんなこと白柳がいうたったといって々庵先生に話していたら、先生が「そうや、

を見せていられたのに――。

嗚呼。川柳が庶民の文芸なら。その庶民を

悼 故人今 咳きつつここに 柳 在る如し 氏

俳人 右城暮石

りで大いにいきまいていたのに、天は非情に じめ、今後もますますハリきらんものと、独 まったのだ。憎むべきは病魔よ…… 爺の白柳先生の貴い生命をむざんに奪ってし も私の出バナをくじき、この選者である好々 れる九輪抄に急に思いだしたように投句をは イ二、三カ月前から、私は氏の担当しておら モアに富んだ、楽しいものばかりだった。ツ うな解り易い、しかも機知とペーソスとユー これがほんとうの庶民の文芸だと思わせるよ ・革新の何れにも極端にはかたよらず、正

これは作家白柳というより、選者白柳として

ような気がした。

がまた急逝直前には定型をとなえたりした。あせりから自分で破調の句を作ったり、それさきにもちよっとふれたように、なにかの した。それには条件があった。厳選を限界ま 戦いをつづけていた。最初は四ページ用意を 設した意味がなくなってしまうのである。 い温情はわかるが、それでは「九輪抄」を創 なかったのである。一句でも多く活字にした ージをつくりたかったのである。 の選評、つまり白柳さんの文章で読ませるペ でやって、秀句鑑賞でもない、白柳さん独自 ところが、温厚な白柳さんには厳選ができ 「九輪抄」では、白柳さんとぼくは無言

初心者指導はバツグンだったとおもう。のなやみであったのかも知れない。とにかく ともいわずに死なれたような気がする。 厚な人だっただけに、ぼくに何かいいたいこ たに意見をはかない人だった。根っからの温 「川柳雑誌」時代から、編集会議でもめっ

ます。

永い間のご指導、ご支援をた

白濤明先生 追悼句会

-日本海川柳友の会

布堂・独歩・静枝・秋女・筆子・千代・笑王 影・茗人・道春・天雀・香村・よしの・進・ 出席者―花子・越子・柳魂・春海・貞山・星 酔々・洋々・美由紀・とし江・乱坊。 慈父として慕われながら古老逝く 茗

れないし「九輪抄」で白柳選の味を世に問お うとした意欲のあったこともぼくにはわかる

何集を出すことも、その一つだったかも知

にあせりだしたという感じだった。

白柳さんはこと一年ばかり前から、何か急

不二田一三夫

温厚な人だった

謹

川柳会は、昨年十二月句会をもって せ、これをサヨナラ句会として、 故清水白柳先 生の追 悼句 会を 済ま 永らくご支援いただきました玉造

裡にその幕を閉じさせていただきま 出席者三十名全員「蛍の光」の合唱 (柳宏子)

栄さんの涙ながらのご挨拶をもって

造川柳会を閉じさせていただき 昨年十二月句会をもって、玉

ざいました。 まわりほんとうにありがとうご

玉造川柳会

西田

西田柳宏子

追悼句

御霊今日どこの句会に在すやら 句評まだ耳に残りてベレー帽 秋深し旅行く人へ散る木の葉 毒舌の柳話が聞けぬさびしさよ 玉造りこの人居ない秋さびし 白柳の枝は折れても幹があり 柳に生き川柳に死し安からん 句する意欲崩れる昨日今日 雲たつ師の立ち給う峯いずこ ていくわけにもいかんからさびし 香に哽せたまいし応らえなく もう見えないままに柳散る 花 柳好

芳 新之助 桂太楼 いわを 笑 郎 ĖB 師の句座へまた急がれる人しのぶ 白柳選消えて七面咽せび泣く 菊の香にむせて師の恩噛みしめる 訃を聞けば湯村のさくら泣くだろう 合掌をして俤にふれんとす まだ落ちぬ桐へあなたが先に散 白柳師御霊が生きてる九輪抄 童顔のまま死なはった気安さよ 師の柳話聞けぬ句会のすき間 を茲にお詫び申し上げます。 たので、以上しか判明出来なかったこと 報が多数ありましたが、 白柳先生の柩に入棺させていただきま 御遺族の申 風 0 阿 部 久米雄 与呂志 柳太報 河 勇

露の世に魂ほろびぬ句を残 の跡その人柄が偲ばれる

出 あたたかい教え聞かれぬベレー 思い出の中に白柳生きつづけ あの世でも句会を開く白柳 弥陀の世も川柳評に拍手うけ 水清く夢はうつろにしろやなぎ

小松園

津夫

子.

路

眉

L

師の曻天呼び止める語をさが いそがれた恩師をいたむ蓮の 星流る亡き師居給うあのあ 白柳師笑って叱ることがない たり 帽 師

園

よせ書きの師の筆跡に頭垂れ ひよっこりと笑顔で来そうな白柳師 はやと

柳界の夜空に巨星 面の都合で省かせていただきました。 ※多くの方から弔文をいただきましたが 一つ殖え

師の温い手今は無し

威張る」竜児選。投句は岡山市西大寺幸町 九〇宮川陽仙宛。 第二十回西大寺会陽川柳大会は二月二十日 午後六時から岡山市西大寺市民会館で 兼題は「二十」風来子選。 「揉む」藻介選。 過去 俊平選。 「市民」秀

閣で一

月二十日午後六時から開催され

▼川柳塔社恒例の新春懇親宴が心斉橋の

会館で贈呈式が催された。

が受賞。

昨年十一

月三日中

央区新富町

の印

刷

果選。 開催。 ・第五回川柳文化賞は東京都の山路星文洞氏

柳

界 短

信

儀当日、

この他に各方面の柳

人の

弔

吟

出 郎 受賞者は三宅武夫 一月十三日岡山遺族会館で、 版記念を兼ねて開催。 賞受賞祝賀、 岡山県文学選奨受賞祝賀川柳大会は昨年 十九平忌、 (岡山市)と決定。 文学選奨川柳部 古備団子二十 浜田久米雄氏路 門

会をひかえて諸氏の決意がみなぎる。

勢を示めす活発な意見が交換された。

本年七

柳

一日に催される路郎先生の第七回川

を囲んで、

なごやかなうちにも川柳塔社の姿

阪参事と常任理事が出席。

理事長、

副理事長

た。

大成

及 黄銅六角ボー U 特 殊 換 ルトナット 物 全般

西出螺子製作所

TEL 大阪市天王寺区空堀町八番地 夜間 三四五二 74 74 79

に走りまわった労作である。十二月分までノー 川柳家の暦」は故白柳さんが数年間この取材

月生まれの

稿

遺

1

13日

5日 6 5 Ď 日 食し 湯 貴 山 田 度 M 36 は べる日 いまま T 2 T 14 M 42 れ 東 伊 宿 丹 京 毛

14日

15日

かたつ

むり全速力

でございます

白

房に

買

戊戌

Щ

んでるねと云えばバレタと電

話

高

知

和歌

せそうに来ては何かと持ってゆき

T 5

高

知

7日

友

高

石

15日

西

15日

岡 魚

伽監洞

M M 36 36

和神歌山戸

7日 8 日 日 米 浪 進之助 M41 戊申 モーニング煙草を入れるとこがな モーニング煙草を入れるとこがな 生に光っ た靴もようは 鳥 取 阪

馬焼

て堂守ひとり

風の

中 癸丑

壬寅

東

京

根木九 M35 壬寅

果さなかり /]\ った約 十支尾 があり黄昏を帰る M 29 T 11 小 静 松 岡

ふと母 の風 0 に身の置き所妻と古る 匂いに覚める泣 M 40 芦 東 京 屋

20日

19

日

20

5日

Z

香

111

11

日

姫

路

20日

5日

鶴声 M36 癸卯 36 癸卯

1

尾

11

日

はやがて離れゆくもの梅匂う

辛丑

東

京

10

日

眠りの父は仏のそれに似る

乙卯

神

戸

10

日

T 2

弘

前

9

日

12日 12日 12日 11 日 のない日は 0 春雨にして S 7

堺

S 5 広 倉 金 島 敷

酒豪もう老いて二へ口 佐野白水 全地球萠えてわたしにひまが 弦太朗 合の酒に寝る T 7 T 2 大 岐 阪

柔らか 家計簿をきっちりつけてどめとらず にも食わせず天下もとらず **西尾 青一路 M**35 ま 吉 0 れ違 L 元 田 勝気な妻に支えられ ・ M 23 庚寅 機微へ 白光子 圭井堂 う互に目もく ある日は馬鹿となり 地を割る力 てい T 8 S 12 M 36 T 4 **M** 35 M 41 大 Ш 須 豊 泉高 竹 奈川 阪 梨 治 原 中 崎 南槻

18日

16 16 日

深辻

22 日 22 日 22 日 21日 云い 伏屋にも 平 きながら女蜜柑 世 か 111 べされ 尾 亦 川居 1月日 ス捨ててはげしき恋に落つ はる子 太希志 不た子 日の日 を兄 を口に入れ S T 11 S 2 S 7 T 14 0 光 壬戌 和歌 和歌山知 大 知 阪

24 日

見おさめとなるは

25日泉

国富んで山

漁

業の首筋

網 淳 24 日

麻

乃

23

日

西 n きし影

别

23 日 わ けをする唇が泣いている 痴 学升 大 阪

柳 先 生を偲ぶ

III 酔 Z

白柳先生が ていた。 宅した途端である。 さんから電話がかかって来た。社か おお 亡くなりになっ 鬼遊さんの声が上 た 瞬

は信じられなかった。 「ほんとうですか。 いではないかと思った。 白柳先生ですか」 私

- ・・ 『『リョッヨで天・地・人を載き、何った。二月句会に先生選で人、三月句会に一本覚著」 コンター で白柳先生にお目にかかった。この時兼題初出席したのが、四十三年十二月、はじめ羽曳野病院を退院して、どんぐり句会に 「お歳暮」で天を載き嬉しくてたまらなか ĖB 来の希望がもてそうになって来た。 ・白柳両先生の御指導、 局四カ月で天・地・人を載き、

25日 風に老母と歩けばはは小さー 田

一月堺吟行に

参加できなか

2

四十四年六月には箕面吟行があり、四十四年六月には箕面吟行があり、 ろお話も伺えた。 ています」
ています」
といい作品を見せて頂けるとたのしみにしめての新年を迎えられておめでとう。今年 四十五年一月先生から「同人としての初 一途をたどっ いろい た。

う」年頭の決意。しかし、その先生はもう「よし、今年は先生に喜んでいただこれだいた。 おいでにならない。

で表も、健康そうな御様子で選をなされた で表す。と申し上げると「俺は大丈夫、 気ですか」と申し上げると「俺は大丈夫、 気ですか」と申し上げると「俺は大丈夫、 気ですか」と申し上げると「俺は大丈夫、 気ですか」と申し上げると「俺は大丈夫、 気ですか」と申し上げると「俺は大丈夫、 気ですか」と申し上げると「俺は大丈夫、 八月不意に、阪和病院に御入院、 お見 舞 た。

米をとぎ乍ら女をすり減らし 今日かと街あ 0 S 13 M T 26 甲子 るく 竹 奈 旭 原 良 111 27日 27日 27日 26 意 岡 二太郎

福 岡 28日

河の詩が蝕まれ 目のごとき皺動く 居 M 41

堺

M 42

紡績

過疎に住み旧正が来る孫が来る 巡視する夜空きれいな月と星 見聞くひざに落書 へ行く娘 0 月 靴が真白 枝 S 8 T 9 M 44 **M** 36 8 63 庚申 辛亥 癸卯 和歌 横 高 松 高

II

知

Щ

知

整

浜

本社十一月句会が、先生とお目にかかっの話も聞き、不参加を誠に残念に思った。の話も聞き、不参加を誠に残念に思った。 った。 大分抜けられ ましたね」 で、帰り御一緒したので「分抜けたように思われた。 た最後のお別れとなった。 「いや、 脇取りをしていたので、 フフン」とたいそう楽しそうであ で、先生の句が、大 と申し上げると 玄関 大

これが 先生と最後の会話になってしまっ

達は先生の御遺徳を忘れず、この道にますれている。先生は消えられても、生命力はれている。先生は消えられても、生命力はかし私達は川柳というかたいきずなで結ばかし私達は川柳というが、誠にそうである。し 精進する決意を新らたにするの だ

お 2 な 手

N

中で育ったお

さ 子 選

んな 手を 雇い んな手も そろい お燗は 甘い風 雀 踊 子 史 魚 どんたく

おんな手は 無用独身 主義者ですおんな手が 随しい後添え 娶る辯おんな手を 頼りに過疎の 村の朝法人になっておんな手退きさがりおんな手でどうなり育つ二男二女おんな 手も 飲み 寄合の村 平和おんな手が 揃い男手を こき使いおんな手が 揃い男手を こき使い おんな手で支えるくらし紅も捨ておんな手も 不足苗床 なげいてる 女三人 住んでておんな 手が余り 焚き出しへ 何はともあれ 女の手 肖克里孜一藤祥新杜杜 二枝風孝郎持月助月月 七面山 明

おんな手に変えて経営うまくゆきおんな手に重荷となった店を閉めおんな手に重荷となった店を閉め グルー プを組を早乙女バスに乗り 洋 一信利宵可

おんな手と知って役所も目をつち おんな手で生きるに荒い口も利き 弘

こんな日に おんな手が駈ける台所湯気が立ち 揃うおんな手 羨まれ 干

月影

が

白く くだけて 光 る 湖

福 静観 子 堂 素身郎

ホワイトカラーという首棚になるでする 釣り人を 呑んだ白浪 荒れつづく

脚のはやい白雲を黒煙が追っかい

柳 楽 鶴 丸

選

白砂青松ヘドロヘドロの田子の浦 欲望が つきない 今朝 の 雪景色

のよごれ 風 切る 肩になり

枝住楽朗

っている

おんな手の休むひまなコンベアーおんな手が あって母だけ 忙しいおんな 手の 多過ぎても 又 困り おんな手で守るのれんを見直され

干バ正秀 代ト史峰

天も

地も 包んで 雪の朝

史峰

んな手が最後の始末してくれる んな手がないので入院すと決め

いわを

おお結お

んな手がほしい或る日の幹事会

肖克里孜一藤祥

当にしている 女の手

あける 秋 女

人影は黒く樹

冷戦中も白いワイシャツ着せてくい 真白く 干して誤解に 勝 おんな手に限度先祖の土地を売りおんな手の 限界店を もっただけおんな手の 中の男が 冷やかされおんな手の 中の男が 冷やかされおんな手の 中の男が 冷やかされ *んな手のハンディキャップを遥か越え るんな好 十十輝信止止 龍龍 親二 扇露千千 水声翁翁 灰が降る 町に白蝶が いたふびん 冬山を一列に行くっ雪女待つかまくらの 心へ 眼を磨き澄ました白 だてなく美化してくな雪が好 衣 から はみ出し ている 恋 のドレス似合うてまだ嫁かず 憂国 救助 子 62 0 杖 き 隊

代 朗 治二美明住 H 可 能 性 たたえて 白の 無性 格路地 暗く 斜めに 白い 貸 間 礼 白票の 数に 自省を 強い られる 白い花 身ぎれいに住む 寡婦の庭 白い花 身ぎれいに住む な場の庭 吐く息の 白さに大志 今朝も燃ゆ を 見る 瞼 の 中の 白 い 蝶夢 を 見る 瞼 の 中の 白 い 蝶夢 を 見る 瞼 の 中の 白 い 蝶の はい はく息の 白さに大志 をが呼び あこがれの 白線若き日の はかま ペンを捨て バ露 ト 杖 ふみよ 柳国新七龍観 子彦助山堂 綾十青竜子 女庵子 新之助 初 どんたく 15 美 浦

吟 まっ 白

T D

河 村 日 満 選

SP]

万

万的

1・松川

杜的共著

序文

中島生々庵

主幹

٠

正本水客氏

アイロンに気をつけてやと妻多忙 アイロンを切るとテレビが待っている アイロンとミシン戦火をくら抜け 指につばつけてアイロン試される ハンカチ、アイ ロンもをデートの日 七面 どんたく 月堂子山

舞 扇 0 か 丸 な地め 0 白 0 指 地 0 心 3 訴 見る える 初 于

甫

翁

デイトなズボンアイロン念を入れ アイロンも自分でかける子に育ち ハンケチの真白アイロンとの対話 市場籠アイロン消したかな消したな

どんたく

シーツに 嘘 0 な 40 夫婦 峠

アイ アイ 新 アイ アイロンの アイロンの イロン イロンの 妻の楽しさアイロンがけはずむ ・ロンに ロンで皺のばしたい歳になり ロンの 0 機嫌は唾でテストされ 下で素直に 折目女の 聞けば女房は 妻へ雑用 い 折り目揃った 朝の駅 眼にとまり のびる布 働き手 いそびれ 伶輝利十杜思秀里 止 人親美庵月月峰風

> アイロンを二度たしかや家を出る ない 髪アイロンで アイ ロンに 歌が 0 0 + 梁 止庵

新妻の

0

アイロンへついでついでが続く朝

句 的

~ 1 万的 ・杜的のダブル 的 0

優雅な日本画を見るような川柳が全

送料 近

四百円

共日

発

111

柳

塔

社

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

ジを彩どります。

返事だけしていアイロン直ぐ立たず 火の元はアイロンだったビルの窓 アイロンに 恨みの残る 火事現場 アイロンへすねるウールにひまいり アイロンもかけてうれい明日がき アイロンの形に焦がした女中部屋 らしい い綾英仲 わを女子美 代仕男 素身郎明 アイ アイロンの 温度目盛を 嫁入りの

アイロンへ しみじみ思う 物価高 アイロンの余熱のような恋を抱き アイロンで伸ばせる皺でなかりょう アイロンの口で受け取る味 アイロンをかけてやりたい 時のアイロン 未だ使い 信じ過ぎ 象の肌 静国一一古晓信 步彦郎治方童二

舞扇 持てば 老いない・白雪は 答えず 今日も一白いのが 誇り 世帯を一

白い 足袋山

醉木杜雪梁

歩魚月美水

アイ

ロンへ夫の鼾

脱水機もうアイ

ロンのいらぬ

1

U

シの

政治

の不満

訴

える 廻

切り

便笺の

余白 本音を 吐く ところ

イメージが 違う白衣を

を された 故郷

味に

触

脱いだ恋

術師の 指の白さは

魔物だよ

まっ白い

国で 白 黒 差 別 され

交ぜて 交ぜて 交ぜて 白影の 色

白が好き 少女の趣味の

崩れ出し

敬峙古克晓止洋

方枝明水々

喜びの アイロンを切って話題に向き直り 借りてきたアイロン温いまま返し アイロンがするし焦がしたも思い ロンで足らず寝敷をすす 明日ヘアイロン かけ終 められ

千扇宵暁弘 代水明風朗

傷め つつけ 利

水 美 -49

題 手

恵

朗

名人もスランプを体験されたであろうが、ぬ。それ以上の句を生めと、私は解す)

似てはならぬ。それ以上の策を発見せよ。

)他人の手をよく観察研究するが、それ ぬという意味に、私は解してい

を真

力となっ

ているかを知ら

ね

ば

(人の句を熟読玩味する。だが真似てはなら

る機 大きな喜びの日であった。その中の一片を披ら多くの教えを感じ取って、私にとっては、 と夕食を共にしながら二 露して参考に供したいと思う。 にめぐまれ、名人の淡々とした談の中か だが、其日私は、 月二十五 H 、将棋名人大山 時間ばかり、 曲 紀夫割服 歓談す 康晴氏

靴を履く者が下駄履で散歩してみるもよかろことだ。例えば、衣服を替えてみる。いつも すこと、 解な答が返って来た。その第一は、生活を正れの脱出法如何という私の質問へ、いとも明 が名人へ同時に立向って、勝負したが、三人名人と歓談のあと、棋盤を三つ並べて、三人 う。名人の体験が語る名言だと私は思った。 ものだ。次は、身の回りのものを替えてみる う。机本棚などの位置を替えてみるもよかろ へば将棋手もなくひねりひねられる 生活が乱れているとスランプになる

よき句材をとらえているが、その (妻の手に柚子の香匂うくつろぎよ) 、妻の手に匂う柚子の香国おもう) も少し 土産と機嫌の良さを感じられ 子の香が仄かに妻の手に匂う 表にのぞかせてみたい 裏の と思う。 気持ち 孜

孝

保母さんの両手に児らが鈴に

は解して

いる

ぜ入選したかを十二分に反省して、その長所

彼方に捨てろ。思う通りに入選した時

も、な

んの句と勝負をすることにしよう。 棋談義はこれ位にして、いつもの如く、 正にこの句の通りだと痛感したのである。将手の内はとうに読んでる王手飛車 洋 々

皆さ

を次の作句へのプラスにせよという意味に私

(十七字の一字一字が、どれだけの力を持なを持っているかを知らねばならぬ。

分の駒の一つ一つが現在どれだけの

行 動 時も十二分に反省して見なければならぬ。

一分に反省し、その句は、いさぎよく忘却の(句が没になった時、なぜ没になったかを十

みて、それを忘却せよ。又思う通りになった ●負けた時は、その欠点を十二分に反

省して

で、この句は、私なら次の如くに直したい。 共に、いとも簡単に打ち死と相成った。

そこ

万竽

お手植と知らず木枯ぶっつかり)

の松とは木枯知らぬらし)

(へば将棋手もなくひねりつぶされる)

手の内はとうに読んでる王手飛車

現して川柳たらしめるかに苦しまねばならぬに過ぎぬもの。そこで、この句意を如何に表句意は判るが表現で落第である。つまり説明 話し言葉を入れて見てはと、考えて見よう。 そして又ちがう角度からつついて見よう。 きを演出してみることも楽しいものだ。 このままでも通用しそうだが、もっと強い いくらか川柳臭が匂って来たようである。 (手土産などさげてよっぽどごきげんさん) (ごきげんですなと手土産かんぐられ お手植の松もひっそり冬の中

手を打てば緋鯉真鯉が目を覚し細い手を妻内職にかけている 万に一の吉運手相で嫁きおくれ 手は見せず狐と狸にらみ合い 迷い覚めてからの化粧の手が早 手土産がいるほど遠い仲となり 忠告の手紙四角な文字でくる 女手の世帯やたらに釘を打ち お手伝いせっせと息子の下心 t 誓和露利翁初杜春洋 二風声美童甫月海敏

手作りの味は日本 手術着の血痕古い医語綴 が良かったなと荒れた手見てく 家の内助そしらぬ 0 顔で 3 いる ず 葵近

ふさがった両手へ片足手伝わせ孫の手で背中搔けないほどに老 表彰状寡婦あかぎれの手で受ける なり 綾三軒生 十二大 女四楼仏 峠 葵 水水江

手頃だが値札の桁が折り合わず駄々子へ手を焼く顔のうれしそう あわれさはサクドマイドのはし 初 L わ手で呼ぶことし の陽 しゃぐ手 まさひろ 藤 持

どたん場で逆手見つけてほくそ笑み 手拍子へ童心の足よく揃い 手を握るとこまでもてず消えた恋 猫の手ではどうにもならぬ健保事 荒れた手と手に女ごころ通い合い 啄木のこころでわが手じっと見る わたくしの選んだ人の手の温さ 児に手を挙げさせて横断 の散歩手相見へ立ち止まり 務 静観堂 茂 富 弘新之助 正夫 子 美華美

手の内を見抜いて受けて立つ構え

白柳さんを偲ぶ

堺の追悼法 要句 会

吉 香

たが定 集まる人々四十四名、 要並に追悼句会とし、激を飛ばしたところ、 柳会・若芽三団体主催に振替えて白柳追悼法 本会の定例句会で、 盛会振 客年十二月十三日棹尾の句会を、 刻 さん葬送の哀し り、 師 走の風の吹く、 続 集まった人の要請を入れ 会場の堺萬福寺に 他社の人々もまじえて い十一月十三日 寒い日であっ 堺・富 0 夜が

> 謝している整唖の手振りに嘘が無 めぐり来たブームに陽の目を浴びた手記 の手のような妻ですゆき 届 止水

手まで縫っておぼえた和裁に助 67 握 手と 0 人信じよう けら れ

手作りの また 自信の音を響かせる 玩具器用なパパ 6 H 曜 狩 1) へを持ち 3 n 富 濁 隼 繁 久 士ゲ水人 子

手応えがあったかいやよと背を向ける 筋くれた手がその過去を物語る 親の手をこうも焼きます三ツです 夫婦喧嘩泣きの一手にしてやられ 惚れぼれと見るウインドの手描染 王手飛車 の効き目もみ療治よくこたえ 秀 静子 村

> さて、 とにしょう。 せることにして、 か、私が勝ったか、 は、どうであったであろう。あなたが勝った 節くれた手に釣り合 タクシーの無情挙げた手見てくれず 相愛の手を握らせた丸木橋 骨太の手が知 り上げた手にすがる子を打ちそびれ 皆さんの一句一句と私との対決の結果 っている話 次回の勝負を楽しく待つこ その判定は、あなたに委 わ 82 男前 てる 満津子 比呂路 賛平

二月二十日締切 題 従 四月号 発 表

图 山県倉敷市下 津井三五 恵 墨七

々、 主幹中島生々庵先生を先頭に、焼香に立ち各昭海師の読経に遺族四氏に続いて、川柳塔社 今更に惜しい人を先だてたとの御話に、聞く 庵先生の挨拶を兼ねて、 見えた。 明を隔てた白柳さんの顔も、ほころぶように 悼法要は誠に厳修裡に執行され、 0 立場から白柳さんの病状を詳細に述べられ、 八々の目 数々、 太氏寄贈の遺影の前に、 ける人々で、 ありし日の白柳さんを偲び冥福を祈る追 6 続いて、 ri 法灯ゆらぐ香煙の下、 氏 うるみ勝ち、 の謝辞があって、 会場も 追悼句会に入り、 狭い 医師としての専門的 遺族側から、 供花、 ほど、 同寺住職河野 引き続き、 心なしか幽 富柳会長 中島生々 長男

> せた。 しまれた人に、 題とて、 題五題 た。後ち、 も白柳さん一入感深く聞かれた事と思われ の五時半、 氏の句も入選する和かな句会風景は、 小松市の故郷の句会の人々や、 お膳に酒杯を傾け、散会したのは午後 川柳の為めに生き抜いて、 清水白柳子」 草春氏を追加追加で、 寒風益々吹きつのる夜の街 ふさわしい句会となった。 の雅号の一 やきもきさ 字宛が Ш 遺子健 何より た。遠

富田 あらわれで茲に附記して置く。 に花を供えて下さった事も白柳さんの 因みに、 林 西岡市長からご出 本追悼法要費として中島先生 捐下さって、

第二百三十五回(四十六年度第一回)

萬川

入選発表

六十一句 知 村 好 郎

子の使い印紙と切手取り違え

遊

切手貼り足して母の顔浮かぶ 高槻静 大阪水 馬 客

乱雑な宛名切手までもズレ 鳥取露 杖

切手十枚送っただけでそれっ切り 切手まで添えて近況問うてくる 桜 井 雀躍子 敷 三林坊

切手貼ることも忘れたラブレター マニアの目に商品となる切手 大阪あいき

返信の切手も入れた罠がある 大阪 代 風

切手だけ歩いて渡す請求書

切手趣味だけは飽き性まだ続き

拝む気で切手を貼った無心状

=

アルバイト切手ばっかり貼らさい

恒子

ギョーザを食べたを切手知っていた

大阪

一三夫

愛たしかめる手紙に切手しない貼り

大阪形水

アンケート出さず切手は取ってき

江ともこ

不足金とられて拝受旅だより

犯人の切手の唾が決め手とは 東大阪三十四

速達へ切手貼るのももどかしく 十五円恋の切なさ運んで来 大阪

老眼はうっかり切手を逆に貼り

恋譲る手紙切手も濡れている

襟立てて切手の列に僕も居る

米子干

代

切手別納ダイレクトメールの山崩の

今治 宵 明

スタンプを遁れて切手剝がされる

東大阪 肖 二

大阪金三

追憶の人へ切手はもう要らず

切手まで貼ったところで又迷い 切手まで貼ってポケツで皺になり たかが切手貼るにも気性うかがら

運のいい切手よ麗人の舌を知り 大 田 軒太楼 雄 堂

取敢えず託びる切手が歪んでる もう一枚貼ろか重さ手で計り 大 阪 新之助 倉敷干翁

年賀状切手シートの運もなく アリバイが切手の消印からくずれ 切手まで裂けて郷里から餅が着き 鳥取洋々 松芳 進 朗

古切手集めて善意の灯をともし 返信用切手が重荷になる便り 真沙子

切手まで貼って恋文よう出さず ラブレター切手の位置に気を配り 子 石

子

Ш

切手帳抱いてひとりの趣味もよし 太平洋越えて切手がよろこばれ

大阪美房 江 新妻に切手貼らせる旅だより 参銭で文通した仲共白髪

八代史朗

絶交状敢て切手を逆に貼り 美 もうお逢いしません覚悟切手貼る ポストから離れて切手思い出し

返済を切手で充たす小さい借り 世の移りしみじみと知る切手展 小会社の弱味返信料が要り .

恋の使者に云え切手ちよっと妬け

十五円では吐き切れぬ思慕綴る

どんたく

教えてくれと返信切手入れてない彼女の手に届く願いのある切手潔癖なくせに切手はなめて貼り 貝塚 つき子

社の切手拝借してるラブレター

大阪代世

父さんに熱が移っ 税務署へ切手貼らずに出したろか大 阪 美 房 返信の切手へ賭けている諾否 無造作に切手を貼った請求書 句 た切手趣味 里 風

52

ウソついた舌で切手を貼 * 大 Poi 2 て出 夫

投句先 四 要

三月二十日

市 南 区鰻谷 仲之町二〇

大阪 川柳塔社大萬川柳係郵便番号 五四二

亡き母

へ届く切手の無きものか

どんたく

B

一報の

切手夜汽車の膝で貼り

子

枝

句

手がかり

の切手発信消えてお

吟

四十六年度

ベストテン()

月現在

不徳非力でありますが故松江梅里 者を引き継ぐことになりました。 清水白柳氏の急逝により私が選 句風を基盤として私なり

にお願い申上げます(好郎) 柳の持つ により創立されて十八年の歴史を 一層輝かに進展さすべく、大萬川 ています。皆さんの御協力を切 生懸命選をしてゆきたいと期

会 会 B 第十八回大萬川柳大会 昭和四十六年二月二十 町三丁目 大阪市阿倍野区松崎 (日) 十二時半 大萬(故松江梅里 (大会句集を含

昭和四十六年第三回

引き継ぎ

五句以内 二月二十日

兼題「大笑い」

昭和四十五年度

ベスト

テン表彰

は禁物

の長丁場へ落

以下

開会の 금

拶話辞会

川中若

村島本尾好々久

庵志 郎

色である。一年が大萬川柳の特

栞

79

阪

7 ,

7 7 -0

下

=

0

真沙子

九八七六五四三

美

阪 阪 97

五 0 0

一文 扇 瑞 三 夫 秋 水 枝 文扇瑞

> Ξ = 六、

どんたく

恵二朗 ゆきを

倉 宝

= -=

0

席題

三枚目 素通り 野田 三題 3: 素身郎、 (当日発表) 日本 高 杉

谷井扇

川村

好二

以内、午後二時締切 本田恵二朗・兼席題三句

準梅里賞 里 正本 二三氏 水客氏 天笑氏

ら折り紙つきの 故路郎 光生

って、新しい顔好郎氏の選とあ

柳 意味からも興味 川柳はそういう だろう。 ▼古豪おそれず 深いものになる るとおもう。 ぶれが投句され

大阪ないしる 書 を命せることろ 用 短 品 册

村 一林坊選 好郎選 鬼遊選 素郎選 千代選 水客選 便笺に記載の上二月十八日までに代を含む)各題別々に柳笺または。投句のみの方は百円封入(句集 大阪府高石市高師浜三丁目五 左記宛送って下さい。 方は早目にご通知下さい) 郵便番号 投句のみの方は百円封入 (選者の方で当日出席不可能 五九二

主催 川柳 大萬川柳会 塔社

53

好代顧 評

ベストテンご招待懇親! 朝会の辞 菊沢 小

> 松 園

郵便貯金会館で開催、京後一時から上本町九丁目阪句会は一月十日(日)阪句会は一月十日(日) 仙宛。 ・ 大会は昭和四十六年二月 ・ 大会は昭和四十六年二月

展 柳 氏元 を 一七日日 便りを待っていま

来る

賞柳▼の京は▼と高だで氏所一が阪 惰に年昭一都暫東薫杉。開の長月あ神 で忘れた靴を、「一般などでであれた靴を、「一般などのです。」という。

.

あ

ちらからとちらから

南之、岩村憲治の三氏が選 ▼川柳ジャーナル十二月号 は、自選作品集を掲載(四 十四人の作家の作品)、第 三回ジャーナル作品年度賞 に時実新子さん(姫路市) が、準賞に墨作二郎、金子 が、準賞に墨作二郎、金子 が、準賞に墨作二郎、金子 十は▼ 四、川 は戦 日柳 な争 他三句他三句

富田林市富田林町24-4 TEL 07212 3 2 0 6 4

ばれた。 ▼関西川柳懇話会新年総会は一月二十四日(日)午後 一時から阪神尼崎駅前国際 飯店で開催。 「一時から阪神尼崎駅前国際 「一時から阪神尼崎駅前国際 「一時から阪神尼崎駅前国際 「一回例会も復活開催された。昭和四十六年二月から た。昭和四十六年二月から た。昭和四十六年二月から た。昭和四十六年二月から た。昭和四十六年二月から た。昭和四十六年二月から た。昭和四十六年二月から た。昭和四十六年二月から で見ばれた。発 下愛論、水谷竹荘諸氏。発 下の一七の一八水 谷竹荘 で開催されることになった。会長若林 ることになった。会長若林 ることになった。会長若林 ることになった。会長若林 ることになった。会長若林

効 能 疲労•神経

康 33

新 人 紹 :01 11 介 出 文秋・一三夫推薦 君 子 子

る男」の句が忘れられない。ご冥福をお祈り申し上げる。

▼河村日満氏(鳥取市)は十一月定年と同時に市会議十一月定年と同時に市会議上二月に明本の譲入の譲入となるよならをされた。「定年へ当選といういいみやげ」

▼工か月の東奥日報社生活年五カ月の東奥日報社生活がら暫くとを、「一次の鐘に百八のぼんがら暫くともに一がら暫くともに一種のが表表り、新年とともに一がら暫くとと。「一定年は孫に拍りながら暫くと。「一定年は孫に拍手でこと。「一定年は孫に拍手でしたいとので、「一大阪同人」は十二月二十六日の関西テレビ、イブニングショー い。ご冥福なの句 個をお祈り申句 が忘 れら き でしたなってい 人 ▼ (断酒) は (断酒) は (断酒) 草のなやに の盆主さ席 句と訂正かられた。

へ復活。 ▼玉造川柳会は指導の清水 一川一月句会をもって終焉す ることになった。 玉造 杯 は、白柳氏最後の選の天位 では、白柳氏最後の選の天位 では、白柳氏最後の選の天位 では、白柳氏の死去にともない、 本さんが永 では、白柳氏の死去にともない、

同

JII

柳

島

理事長

▼住田乱耽氏(神戸市)は 一月四日午前三時喘息性心 不全のため、市民病院で死 不全のため、市民病院で死 年期の麻生路郎の門下生 着生期の麻生路郎の門下生 を楽。氏は生前、川柳雑誌 安楽。氏は生前、川柳雑誌 を来。氏は生前、川柳雑誌 を上して鳴らし、随筆にも 家として鳴らし、随筆にも 家として鳴らし、随筆にも

▼桜川 不水氏(下関市 同人)は旧ろう左肺化膿症で 人)は旧ろう左肺化膿症で 人)は旧ろう左肺化膿症で 大変間対外、志良氏(岡山参 事)の母堂古登様が十二月 一日八十年前五時半水眠された。一もう一つ日八十七日午前五時半水 は一月九日 阪大 病院で表を全う さ母でに、一人を諸田つやさんが、ご退院の朗 を母郎、瓢太、天笑諸氏は が、その刊行委員を氏(大阪同人) とになった。詳細は次号。 ととになった。詳細は次号。 ととになった。詳細は次号。 ととになった。詳細は次号。 ととになった。 が、その刊行委員長西尾東が、その刊行委員長西尾東が、年年十二要請

のタ▼ 内刊サ

正主ら山 幹れ同 売七を八さ月開木

の一日

が遺句集は

作品が数篇紹介されていは石田波郷集―のほか薫がいる」と―読初めの今がいる」と―読初めの今薫風という優れた川柳作に「私の年少の友人に橘

な松の る風年家高か。作はが薫に

中 お 見 舞 10 申 あげ

同 同同同 百会部 会計 理 垂 菊 金 阿井 沢 井 部 本高北岡尼田橋川村 高橋 操子 事 本多久志 田三夫水外太大水松園市。一世三夫水水水松園 小同同 涉事本戸橘河阿 外業多田高井万 部 中工臼市 木摩 筋藤 村 没 三甲林古古古 ^本 一一柳古薫庸万 子同同志方風佑的 好 浜 小 河 田 西 村 同正西傍菊大 林同 編 同本田 島田坂 尾

集

部 水客

___ 子同同

柳

63

宏子馬む水

塔 社

F

久米

無日茶鬼為仏

本社 新 春

場 以 和 後 貴 時 荘

中川滋雀氏 滋雀氏、 刀間賞 いての有益な話に満場は耳をかたむける 0 語られ、医家としての立ち場から健康間をみんなで分けあって持とう、とし 杯受賞者や全出席者の表彰状は麗筆 柳話は生 副賞の色紙は生々庵主幹をわず K 故白柳 氏

谷凡九郎・西山朝二・城一舟・橘高薫風・山を利志(各一回)清水白柳・葛城伊三郎・神多柳志(各一回)清水白柳・葛城伊三郎・神多柳志(各一回)清水白柳・葛城伊三郎・神 季賛·小浜牧人諸氏。

綾女・圭井堂・与呂志・一舟・万的・誓二全出席者は十八年連続の静馬氏筆頭に肖二 九 諸氏。 ・凡吉・一二三・酔々・鬼遊・庸佑鶴声・維久子・儀一・季賛・新之助

賞は西尾栞氏ときまる。

瓢太・葛城・一三夫・滋雀・文秋・庸佑・出席―新之助・双楽・与呂志・古方・冬二 (河井庸佑整理)

村の子が派手なスキーを縫うてくる

1三・筑前・虎声 一二三・筑前・虎声 ・干寿子・夢成・作二郎・小松園・太茂津・ トメ子・儀一・季賛・凡吉・鶴翠・栞・葵水 竹荘・一治・凡九郎・圭井堂・静馬・静歩・ 薫風・つき子・綾女・生々庵・宣介・迷朗・ 笑・徹舟・肖二・摩天郎・美房・花梢 ・維久子・牧人・鶴声・水京・千万子・形水 一・吸江・誓二・好郎・金三・いさむ ・水客・ . 酔々・鬼遊 ・みよ ・あ .

高

スキー場に 来れは娘の 指揮を待ち 二マーシャル誰れでも滑れそと言い コマーシャル誰れでも滑れそと言い コマーシャル誰れでも滑れそと言い また ひょう は で 吹く スキーから 戻ると戻った 姉がいる スキーから 戻ると戻った 姉がいる スキーから 戻ると戻った 姉がいる コマーシャル誰れでも滑れてと言い 葵万吸一冬美野勝迷恒新鶴勝水綾好水酔一 三 水的江夫二代路晴朗明助翠晴客女一京々舟

> スキー教室ボーゲンきまっ 決心を 見せる ジャンプの スキー スキーゴルフそれからぎっくり 初めての スキーへだるま ゲレンデの 恋はリフトで 笑い合いスキーから 帰る 息子に 屠蘇 残す ゲレンデで 恰好の の子に 笑われている スキー とすべると の スキー 足 痛めても 立てて 帽 自転車 用に 買うて 来る 出陣の場に 少 ゲンきまったとこでい は着く 黒を 笑われず 口にする し似る 腰にち 煙り 着る なる ぐつ 維小栞儀 久松 子園 一 儀万小水柳肖 一的園客志二 文 つ 冬 柳 秋 子 二 志

田

— 56 **—**

女 ひとり 生きぬい てきて 雑煮箸年寄りが 居て お雑煮へ 気を 使い 元旦の 南紀 まちまちに起きて雑煮をねばらせる 煮えつまった雑煮へひとり起きてく 0 煮 も 出して くれ の味 ででき 古方選 醉与栞 々志 一冬つ水新好形 き え 舟二子客助郎水

煮の数若さはじゃまくさそと言い

家族やさ₋ 特で損した 真直ぐに 故太定風雑仏雑 ほぼぼひ たん鍋や たん とくざり 箸紋 壇 0 通せつい 0 食 さしく \$ 題 しょうことなしに起こさな つ汁違っ 5 伸びよ 下戸 っぱり ほたん 7 0 Ш 名 父が 煮チ 瀟 揃 がた 祝う 暖 雑煮炊かせて 物釈に 旅 か 流れ煮 え ンママ の雑 雑煮の 亥年 考えて をしてい 地 63 所題時 会八 煮を たべ終わり か煮 7 八駅西八二 (第一文 (第一文化 展15尾尾七日 句会) 左16宅鬼 会) 加 雑煮のある朝よ 62 な 0 た 0 うま 0 雑煮 灯を 煮山 63 囲 客ぼぼ 箸を割る 煮 つく 3 3 をたた 上げる ずの も呼んん 0 供え もち 入る瞳 のび鍋鍋 き 柳 部門 一介選 静夢美冬一滋宣静金水夢静

き歩成房 ラミ ンコ 題 なっ IJ リズム ズ IJ ヘムに ズ 2 あ 62

アンバ

0

リズム

リズムに乗って

動き出

恋 す

関

0

の中にもリ

ズム失ない

宏子

上がる

は

風

1]

持居

雅々朗翠々城晴梢代

一柳章酔迷鶴酔葛勝花美

D

IJ

故郷

近

ンの ランスの

IJ ズム

ズムが 海の

れ

た胸

みな達者ならこそ我が家にも 心電図 付添い 辛気に 聞く ちぐはぐな リズム で PT 雨もい 0 元にリ 0 IJ ズム リズム 貧しい ズムをつけてまだね ij 年. ズ 季 家にする < T あるり A 1) 兼 ズ ね ば ズ 0 ま 4 4 歌 0 3 真紗子

ばたん 鍋 空の 青さも 書き添ばたん 鍋を 囲む男が 好きにその つもりの 女と 囲む ばたん鍋 を 雪 女 に すすめ なたん鍋 を またん鍋 を しょう しょう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう はんしゅう はんしゅん はんしゅう はんしゅん はんしゃん むかしをほじる くず すすめ 書き添 ほぼ ほ 客とな たん ħ た を食う たん鍋 れたん られ N いえる 1+ 鍋 鍋 り鍋 作柳小冬摩誓 宣冬作小夢 三松 三 松園 成郎志園 二郎 口笛 の リ 船陸狂西労働歌口笛の旅の旅の旅の旅の旅の旅の旅のの旅ののなります。 祭り リズミ 0 活 り囃子の リズム 狂 うたっぱ の リズム 狂 うたったら人生 × リズムには西成日 が リズムの リズム リル チの 冬の 0 リズムとなって IJ リズム 届くお ズ 1) リズム ズムに老を温たたい C 合わ 夕刊 82 岩を ズ列ムに 配 生 米あ 浜が湧き られる

カ

H

噛み まる

雀介歩三京成歩郎笑

になる

かもし

れ

ぬ男 話

2

あぐら

0 ポ

クー

0

上ば左ば

3

囲んで ン

西 尾 栞選

か 12 ま 寸 ムに 天河 徹花好旅生軒太太 笑 産 舟 梢 郎 風 庵 楼

IJ

ズム 5

7

常の崩

1)

なく 10

明

ける

与作品 三美郎志郎産舟

かる

レズム

IJ

ズム

す

ま

IJ

ズズなし

IJ

2

きた

7

1

千万子

IJ 1/2 か違 ズ 3 き十 坂い感地 ーあ静葵冬万 二さ 三き馬水二的

九間町東二丁 ・米・赤字 日 木摩天郎宅 P

往

口番(鬼

車一鉄酔後

・ 大王 を 大王 句

所題時

市九間の

堺国

句

会

進

備

堺

JII

柳

숲

明江佑助雀

題時 南 二月十八日 海川 柳 R・消える・ 柳 B 슾

ピン

バ高架下 紀和クラ

ボ 題 時 南 大 松崎町一 |月二十日 斐 一丁目以和 火·種· \pm 会 午後六時 貴莊

ズ下ち活 畑へ リヘムのなー道の 足り 会だから 合わぬ び 整 える ザきなんだ 好きなんだ 圭 夢 柳 形 千 井 井堂成志水子

郎

りにれ

行に に見

にせ

場を出る。 歩き ははなれぬ はなれぬ お 正 月 が 消えしはない 数 あ 現場 に 似 る 歩 市 が 消えし なれぬ か 消えし なれぬ

かぬ 冬 の 鯉 がぬ 冬 の 鯉 がぬ 冬 の 鯉 がぬ 冬 の 鯉 がぬ 冬 の 髪 いた 成り切れず に 成り切れず に 成り切れず に 成り切れず

水柳肖新天圭滋夢花生好河 之 字志二助笑堂雀成梢庵郎産

年年原法デ年年喪年年ひ毒

it

群群群人群 衆衆衆問衆 00000 声中方弱中に きたしておか かで衆れ た友を 乗って かあう 土 抱 まこずる 好冬圭虎鶴 郎二堂声翠

o) to

4

そ祝年年年年白年年落遠年年バ天年年年職年年年出 れ太輪輪輪屋をはない ウ変輪を 輪長輪輪輪り 輪輪 りはのクウ 噛のの冷ののもな り鼓のがもは袋をは は L 美維牧水迷金栞葛太天美 & 筑古綾美つ金牧小綾水 久 代子人京朗三 城津笑代 t 前方女房子三人園女京 筑古綾美つ金牧小綾水真扇 前方女房子三人園女京子水

群群群群群群群群群群群群群群群群群群群群群群群群群群群

の心

衆の山地衆の山地衆の山地衆の山地衆の山地衆の山地衆の山地

にまぎれの一次の一の一の一の一の一の一次の一次の一次の一次である。

くる

中島生

カタと ぞれ祖

い 敵を のが ある 家も見て も 父祖 伝 敵をがれ あるがな 消えず 圭冬葵静花迷葛柳栞 摩扇庸庸明祥藤 井井 堂二水馬梢朗城子 郎水佑佑軒月持

-58 -

白 壁 の 家 で 朽 ち て ゆ く 女 白 壁 の 家 で 朽 ち て ゆ く 女 かすみ食って生きられず家あきらき 放が家にも出稼ぎの父あり春を待つ 我が家にも出稼ぎの父あり春を待つ な 家族 主義 で 淋しく なる 覚悟 あっぷ声に 世継 ぎを 期待する 家紋 かぶ声に 世継 ぎを 期待する 家紋 家の 子の 知らない 東ね 髪 一 家 支え 取れ 髪 一 家 支え 吉新築へ 一代目 かえる だけには家の 0 を 移るに 早速 握った 足は なっ 知らない 古家 支える た ローンで な 保険 店舗の K 家 ある ると つきまとい 家が 遠い 総 がラス 女. to 未 建 2 ち 竹好 天綾凡千誓虎恒鶴鶴夢 寿子 二声明翠翠成的 三助笑笑女吉

芸を 父はもち 動にて、 牡鶏よ 嫁家重四働い 女男 寝るだけのわが家へ今夜も午前二 来て より 犬が 迎えに出る 出 れ 10 歌 建てた 支える 家の た 決意と 別 自慢 家を と 夜逃げも出来ん 段々落ち めきて 背負 0 伏家も 家とは 見て ように 别 べえば身 百 遠く 戸が 0 家 棟 灯に 家を きし 住宅 わが家 月賦陣 < 崩れ 住み れず たて

六古 栞 柳 音 方 志

微 栞

風舟

雅号ぶっちゃけばな 長谷川三司 す。落語家でテレビタレントの桂三枝と同音などで嫌で中には三 司を(サンシ)と読む人 がいま すが私は 嫌で中には三 司を(サンシ)と読む人 がいま すが私は 嫌ですは 高いた名でそれ以来今日に至って居ます。今では本名の三いた名でそれ以来今日に至って居ます。今では本名の三 何の 誘 0 われ 和 雅号などと云うものは名前と同じで符牒に過ぎな 十八年頃当時川 しもない て川柳らしいものを作 80 (名の三治の治を司に変えただけ) 私の雅号長谷川三言(サンシ) 雑 の梅 0 支部をや た時、 初め 2 て居 (サンジ) 7 句 笺に

> 0 0 世も 0 な ゴキブリの ひさしへ バスの 決まら 家つきへ養子馬鹿に J 地へ結婚 ぬうちに いる すと まま また 家が 家が出 砂ば 地 延びる 残 よし 2 3 0 1) れ どんたく つ章 き子

家も 家の無い 家相平

建てたし 喜劇でも

書こうかな

現場 난

冬扇瓢

へ来い

いそ 10

とは

31

越

水太人

酔うているらしく家へ来い家

箱庭 庭の 嫁の 重文 旅帰り 7 嫁さんが 别 なべもので我が家の幸はことたれり マイ たら 時 ない Ħ 0 言う家風に 家を 口に 合掌 づくりが 写ーム どころか会社 台ーム どころか会社 台 に合掌 しるしのように 旧家ツバメも 継ぎ足し 夫婦 変えて 知っており 写され 危うなり 鉢を置き 楽になり 夢を追う 棲む 好一一静作新一柳水花季野迷 三 二之 郎治夫馬郎助舟志客稍賛路

時 to

一吸花

志治江梢江志

の当る

だけの豊かさ マイホー

k

111 柳 塔社 常 任 理 事会

では

さすがに出席率もよく議題がつぎつぎに 45 年 度納めの理事会が12 遺品保存など、 月4日に 開か かれ、 進 h

らの責任者が西尾栞氏ときまる。

白柳さんの句

集刊行、

それ

さんの追悼句会など、いつもより故路郎先生の七回忌川柳大会、 栞・水客・ 長して打ち合わせをした。 出 席 生 形成・ · 薫風·静馬 多久志・小松園・文秋 いつもより ・古方・庸 二月 時間 の白柳 も延 佑

は

から

わ

私は大して意に解していません。

要は中身です

七十五歳

切は25日着便。書式は発表誌のように。 金井文秋担当

おっさりと指切り出来る 齢じゃない 増 蔵 あっさりと指切り出来る 論じゃない 増 蔵 モノレール 乗って 文化の世を思い 清 涼 モノレール 突通 事故の ない 強味 サイノレール 乗って 文化の世を思い 清 涼 まるべに川柳会 (大阪市) 川村好郎報 まるべに川柳会 (大阪市) 川村好郎報 まるでに川柳会 (対東市) 川村好郎報 かなり合わぬ 縁 など きかぬ 二人仲 扇 世 世 で とった 寝返りを する 夜長 好 郎 大阪市) 川村好郎報 歴 の また 寝返りを する 夜長 好 郎 大阪市) 川村好郎報 歴 の また 寝返りを する 夜長 野市 川村好郎報 田村好郎報 指あ照指回傘あも のっさりと指導が見い 指切りも 座板 国族 のかあり 指切り虫 焼のの 突 あ日 るの文上 お名 な名 教考 未だがらので はじめい だ 灯りかない ま増盛静ち栞奏佐 お お 蔵 治子子 水子

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好大物を洗う 検事の細い首 大物を洗う検事の細い首 はいさんの 肌着は 嫁に 洗わせず されて 恩連隊 から足 洗う喜 びや 哀 しみ 嫁ぐ 髪 洗う喜 びや 哀 しみ 嫁ぐ 髪 洗う喜 びや 哀しみ 嫁ぐ 髪 洗う でんの 肌着は 嫁に 洗わせず あれ程の 天気 くもって きた 洗車 がり つんきに 豊か なる 態 舌がり つん 後暗 さをふと 感じ かんしめる かり かわきに 豊か なる 態 舌がり いわきに 豊か なる 態 舌がり いわきに 豊か なる 態 舌がらる がっし ごし 文学 には 遠し 洗濯 板 妻の 心をとり 戻しうしろ髪ひかれながらも故郷を捨てこれしきの 事にと 思ううしろ 筋 舌がられている赤字と知ってあわて出し 洗濯 板 妻の心をとり 戻し うしろりがいる いん とり 戻し かんかきにと 思う うしろ あり 向かず にし でいるボール から かり は から は さい でん ない は さい ない から は さい をとり 戻し かんしきの 事にと 思ううしろ がり 向かず にない いんがい から は ない から は から は から は ない から から から から は ない から は から は ない から は から は ない から は から は ない から は ない から は さい から は ない ない から は ない ない ない ない から は ない から は ない から は ない ない ない から は ない ない ない ない は ない ない は ない ない は ない ない は ない は ない は ない ない は ない ない は ない ない は ない は ない は ない ない は ない ない は ない は ない は ない は ない は ない は ない ない は ない ない は ない は ない ない は ない は ない ない は ない ない は ない ない ない は ない ない ない は ない は ない は ない ない は ない ない は ない ない は ない は ない ない は ない ない ない は ない は ない は ない ない ない は ない ない ない は ない ない は は は ない は は ない ぎ先店口剛初期心重期夜回りルン・静は大力で つ一痴草修生河鶴虎凡天鬼静比勝弥酔 き 春好儀喜之 郎

一風保子治亭春史長産翠声子笑遊波路恵生々

明

子三馬し美涼春成人

生改の情恋待貧患待 生もも 好 一松武酔光竜桂吐一吸岳

郎歩浦吉々影虎馬来治江太

古 どてら 勝 名乗り 勝 名乗り 中筋 幸峯泉蒼河カ暁浮拝エ快 寿 子夫一石子幸々作夫治 型が 蛇 ロ ス 門水楼舟女舟草山子起

水津

しました。 柳塔賞選考委員を大坂形水氏に委 社 JII 柳 塔 社

ーーこー今ーーーー 番番こ番日番番番番 -今----宴て一ば地二満一窓逃公逃 咳戦衣生公 争食駒害 席の選が下島をある。 鼻ををけ 北 が住山の明 が 落ちて 噂 を 巻き ちらし だって 上八番が出たで 座がしらけいり 毛布にくるんで 徹夜もし 十八番が出たで 座がしらけいり 毛布にくるんで 徹夜もし 十八番が出たで 座がしらけいり 毛布にくるんで 徹夜もし 十八番が出たで 座がしらけいり 毛布にくるんで 徹夜もし 十八番が出たで 座がしらけいり 毛布にくるんで 徹夜もし 大子 座布団の 世話を やき に 強い 男の 太 い 眉 に 強い 男の 太 い 眉 に 強い 男の 太 い 眉 逃れえの 足公少朗会 会 りて害な 于を打つの中に **吹**うてみる 害に 悩まされ かえれ はね かえ スラ 嘘を いどられて といっこう をもどが会いでいる もどがないが ないす期でい あるい いれりしり 進茶為弘濁生 摩筑城左富狂きえ柳天藤真青誓あ小六芳宏信千美双 報 天 久美 みみ 紗 い 竜 天万 坊二生水 郎前南良子二子と信笑持子香二き路子朗子翁子代楽

書知忘臨声生毒汚染

や秋許人同 意したけ けのさ く陽れ そのぬ馴たは の根性を 思所、 は は ない は は ない は は は は は は ま は ない ない は は ま は ない ない は は ない は ない は は ない は は ない は は ない は は ない はい は ない 性妻に、子等が、子等が、 ブ大な笑 クす里な時 聖泉貞不扇 路 望妥康三楽光光君無た清黙万文 報 名か 学 子動水 子明子水陽子子子代子堂青子

風シ久秀志春一生富 報仙 洞ゲ子村津巣登仏士四子平子人

紫天静房静凡笹洋蘭不春こ敦操路笑政峰そ菁延浄清雅康日英逓美五一鬼大郷の酉 苑石 出佐 り ... 佐 り 荘庵水子火女舟子幸朽昇じ子子秋子己泉み居子美子鳳宏夫詩児雄潮路焼陸愁子合

募 集 近作柳 課 JII ★用紙はなるべく柳笺をど使用ください。 ★川柳塔の投句は本社同人に限ります。 兀 題 柳 本 醉 月 吟 樽 塔 号 10 (各題5句以内) 10 客 社 気 発 句 句 表 福 垂 中 2月15 井 島 村 T 弘 葵 好 生 締 17 切 路 4: 水 ĖB 庵 選 選 選 選 選 近作柳樽 JII ★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字 課 は楷書で新かなづかいにしてください。 五 柳 題 無 郵 吟 塔 月 ワトリ 医 (各題5 10 号 10 村 便 句 句 発 句 以内 表 福 III 中 (3月15日 秋 井 村 島 野 好 生 迷 A [締切) 庵 路

★三月は「的」刊行記念句会

選 選

選

選 選

昭和四十二 一年年分 定 発 印 発編 価 刷 行集 行 大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地 大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地 所 所 郵便番号 照替口座 **電話大阪・ニ七一**―三九八五番 百 二千百六十円 大陽 八 一月 十円 月 島 大阪・三三三六八番 五四二 印刷株式会社 柳 蓬 一十五日印刷 (送料六円 (送料負担) 妥 日発 料 社 郎 行

清水白柳追悼句会

蔵の 進

席題

百

円

★投句だけの方は切手50円封

三題

題と選者は当日発表

各題三句

レー 清水

帽

題

柳

話

荘

日時

二月八日

午後六時

和

わきそう 電話622 倍野区

中 松崎町二丁目 1275 島

摩天郎 柳宏子 選 旅 選

若八西

本木 田

多久志

選

小松園

選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区鰻谷仲之町20

111

塔

社

グリーン車」 レ ー ル 3月の兼題

明日のくらしの ノサルタント





アベノ店 621-1231・上本町店 779-1231

貧血 疲れ 老化現象 体力を充実させた 0 . がとれに 弱い 冷え症 の方 < 0 方 61



方 63 方

山之内製業株式会社 東京日本橋本町2-5

有効成分をそっくり カプセルにつめた 現代人の薬です

この朝鮮人蔘の ヒヤクは

の伝統をもつ朝鮮人蔘が 再認識されています すぐれた薬として欧米でも この宇宙時代に

一千年以

朝鮮人蔘エキス製剤



45カプセル・90カプセル・300カプセル

カブセル

★ベレー帽と 気が滅入って仕事がは
事をかぞえきれないほ
事をかぞえきれないほ

す。 (小谷葉子) は郷外を生ます。路郎先生をそうだったそうですが、農乃先生や不二田が、農乃先生や不二田が、農乃先生や不二田が、農乃先生や不二田が、農の大生を不らですが、農力の寒風は細い私を む が n 0



(新型パップ剤)

140 mm × 100 mm 3 牧入 創刊大正十三年 通卷五二五号幅和四十六年一月二十五日 印 腳 解和四十二年一月二十五日 印 腳 暗和四十二年一月二十五日 印 腳 三種解使物區

川柳塔二

月

位面 百八十円 (3)料本





アペール アペール

(包装)36錠·72錠

胃がもたれる/胸がやける/食欲がない/吐きけがする/おなかがはる 胃が重い/胃炎/胃下垂…に

一 フジサワ薬品

住 **鄭** 高 淡 駒 喜 我孫子 庄 道 槻 内 路 III 連 Ш 田 店 店 店 店 店 店



味に輝く北極星チェーン39店

北極星本店/大阪市南区難波新地 06(641)1275

| 百 上 具 中 松 枚 方 上 野 上 財 原 方 店 店 店 店 店 店 店 | 百舌鳥店 上野芝店 |
|---|-----------|
|---|-----------|